



都内観光協会・区市町村向け

サステナブル・ツーリズムにつながる

スタディツアーを つくろう

造成ノウハウ&実践事例集

公益財団法人東京観光財団
2023年9月



■はじめに

近年、SDGs(持続可能な開発目標)の達成に向けた取組が世界各地で行われており、観光分野においてもサステナブル・ツーリズム(持続可能な観光)の重要性が高まっています。都内各地域においても区市町村や観光協会など(以下「観光協会等」)が旗振り役となり、サステナブル・ツーリズムの推進に積極的に取り組むことが必要です。

サステナブル・ツーリズムの推進にあたっては多様な観点や手法があり、何にどうやって取り組むかは各地域の実情に応じて異なってきます。地域の皆さまで一体となって地域のありたい姿について話し合い、現状の確認と課題の洗い出しを行い、優先順位をつけて課題解決に取り組むことが必要です。

東京都及び公益財団法人東京観光財団が実施した「地域のサステナブル・ツーリズム推進事業(以下「本事業」)」では、サステナブル・ツーリズムの推進に向けた取組の一つとして、小学生(親子)や中高生を対象に、地域の環境・文化・経済などが学べるツアー(以下「SDGsスタディツアー」という切り口からアプローチを試みました。都内での取組状況や国内外の先進事例などを調査(詳しくは下記参照)するとともに、実際に都内の3つの地域(墨田区、多摩市、式根島)においてSDGsスタディツアーを造成・実施し、そこから得られた知見を整理したものが本書です。

本書の編集にあたっては、サステナブル・ツーリズムという概念の解説からSDGsスタディツアーの造成ノウハウまで、なるべく簡潔で分かりやすい説明となるよう心掛けました。また、本事業で造成に取り組んだ都内3地域での具体的な事例を随所に盛り込むことで、取組のイメージがしやすいように構成しています。

「サステナブル・ツーリズムの推進に向け、具体的に何から取り組めばよいのか?」、「そもそもサステナブル・ツーリズム自体がよく分からない」という声も多数ありますので、ぜひ本書をお読みいただき、貴地域におけるサステナブル・ツーリズムを推進する取組としてSDGsスタディツアーをご検討いただければ幸いです。

「地域のサステナブル・ツーリズム推進事業」調査報告書について

本事業では以下の各調査を実施し、その結果を調査報告書として公開(2023年2月)しております。こちらも併せてご覧ください。

- ①都内におけるサステナブル・ツーリズム及びSDGsスタディツアーの実態調査
- ②国内外におけるSDGsスタディツアーの先進事例調査
- ③SDGsスタディツアーのニーズ調査

『「地域のサステナブル・ツーリズム推進事業」調査報告書』掲載先:
https://www.tcvb.or.jp/jp/news/2023/0215_5120/

都内観光協会・区市町村向け
サステナブル・ツーリズムにつながる
スタディツアーをつくろう
造成ノウハウ&実践事例集

目次

はじめに

1.サステナブル・ツーリズムにつながるSDGsスタディツアーとは？	2
サステナブル・ツーリズム(持続可能な観光)とは？	2
なぜSDGsスタディツアーなのか？	4
2.日本各地のSDGsスタディツアー先進事例	6
1 富山県富山市 伝統木工技術「組子」制作体験と工場から生まれる環境活動を学ぶ	6
2 岩手県釜石市 「釜石の出来事」を紐解く津波「避難路追体験」	8
3 高知県四万十市 四万十川とトンボから考える「自然」と「人」との共生のかたち	10
4 長崎県対馬市 漁師による見せる漁業&食べる磯焼け対策 海遊記&そう介(すけ)プロジェクト	12
準備編/造成編/実践編の使い方 …	14
3.準備編～SDGsスタディツアーをつくる前に	16
STEP1. 目的をはっきりさせる	16
STEP2. 地域の素材探し	17
STEP3. 関係者を巻き込む	18
4.造成編～SDGsスタディツアーをつくろう	21
STEP1. ツアーの基本構成を考える	21
STEP2. ツアーの「届け方」を考える	26
STEP3. ツアーの「案内役」を考える	28
STEP4. ツアーに必要な「教材」を考える	30
STEP5. モニターツアーで検証する	34
STEP6. 商品としての仕上げ	36
STEP7. 商品化後も振り返りと改善を	38
5.実践編～SDGsスタディツアー実施レポート	39
case1 墨田区	40
case2 多摩市	44
case3 式根島	48

編集後記



❁ サステナブル・ツーリズム(持続可能な観光)とは？

POINT



- サステナブル・ツーリズムとは環境だけでなく文化や社会経済も広く含む概念
- 個別の施策を指すものではなく、あらゆる観光施策に適用される「考え方」
- さまざまな取組例が考えられ、SDGsスタディツアーもその一つ

サステナブル・ツーリズムの定義について、日本政府観光局(JNTO)のウェブサイトでは以下のように説明されています。

“国連世界観光機関(UNWTO)によれば、サステナブル・ツーリズムとは「訪問客、産業、環境、受け入れ地域の需要に適合しつつ、現在と未来の環境、社会文化、経済への影響に十分配慮した観光」を意味します。言い換えれば、旅行者、観光関係事業者、受け入れ地域にとって、「環境」「文化」「経済」の観点で、持続可能かつ発展性のある観光を目指すということです。”

出典: サステナブル・ツーリズムの推進(JNTO)

<https://www.jnto.go.jp/projects/overseas-promotion/theme/sustainable-tourism.html>

非常に広範囲にわたる概念ですので「抽象的でよく分からない」「区市町村のような小さな地域単位では取り組めないのでは」と感じるかもしれません。そこで、以下のようなQ&A形式で、サステナブル・ツーリズムの趣旨と重要性をもう少し解説します。

Q1 エコ・ツーリズムとは違うのですか？

A エコ・ツーリズムは、自然環境に配慮した観光であり、主に環境の保護・保全に焦点を当てた考え方です。

一方、サステナブル・ツーリズムは、環境・文化・社会経済にバランスよく配慮し、持続可能な成長を目指す考え方です。エコ・ツーリズムの考え方も包含する、より幅広い概念がサステナブル・ツーリズムであると考えてよいでしょう。

Q2 取組主体は誰ですか？

A サステナブル・ツーリズムの取組は、行政、観光事業者、地域コミュニティなど、多様な主体によって推進されるものです。特定の事業者だけでなく、多様な主体が連携して取り組むことが必要です。また、受け入れる側の努力だけで実現できるものではなく、訪れる側(旅行者)の配慮と行動も不可欠です(Q3参照)。

Q3 レスポンシブル・ツーリズムとの関係は？

A サステナブル・ツーリズムと似た概念としてレスポンシブル・ツーリズム(責任ある観光)があります。これは、特に旅行者が地域の環境・文化・社会経済に責任を持ち、配慮して行動する観光のことです。

旅行者が訪問先で責任ある行動をとれるようにするためには、受入地域側は環境・文化・社会経済に配慮したコンテンツの提供やインフラの整備などに取り組む必要があります。つまり、レスポンシブル・ツーリズムは旅行者からの視点なのに対して、サステナブル・ツーリズムは受入地域側からの視点とも考えられ、両者は表裏一体の関係といえます。

Q4 区市町村のような小さな地域単位でもできることはありますか？

A サステナブル・ツーリズムは考慮すべき範囲が広く、取組主体も多岐にわたるため、区市町村のような小さな地域単位で取り組むのは難しく思えるかもしれませんが、もちろん、国などの方針や規制などとの連携も大切ですが、小さな地域単位でもさまざまな取組が考えられます。

あくまで一例ですが、

- ・徒歩観光、サイクルツーリズムの推進(CO₂排出量削減)
- ・文化財の見学マナーを周知するための動画の制作(文化財の保護)
- ・地元食材を活用したご当地グルメの開発(地元の経済活性化)
- ・SDGsスタディツアー(P.4参照)などです。こうした地域ごとの細かい取組が積み重なることで、ひいては地球規模でのサステナブル・ツーリズムの推進につながります。できることから一歩ずつ取り組んでいきましょう。

Q5 サステナブル・ツーリズムに取り組む余裕がありません…！

A 都内の観光協会等の中には、予算や人員が限られ、新たな取組に手が出ないところも多くあると思います。しかし、サステナブル・ツーリズムはあらゆる観光施策のベースとなる考え方です。必ずしも新しい取組を始める必要はなく、既存の取組を環境・文化・社会経済にもう一步配慮できるよう改善していくこともサステナブル・ツーリズムにつながる立派な取組といえます。

Q6 重要性は分かりました。取り組むにあたってまずは何をすればいいですか？

A まずはサステナブル・ツーリズムの推進に向けて必要な取組の全体像をイメージするために、観光庁が発行した「日本版持続可能な観光ガイドライン(JSTS-D)」に目を通すことをおすすめします。JSTS-Dは環境・文化・社会経済及び持続可能なマネジメントの計4分野で構成され、それぞれの分野ごとに目指すべき項目や考え方、具体的な先行事例などが記載されています。

自分の地域での取組が、ガイドラインでどのように位置づけられているのかチェックするとともに、個々の取組を企画する際は常に「JSTS-Dのどの項目にあてはまる取組か？」と考えるようにすることで、サステナブル・ツーリズムの文脈での取組意義を再確認できたり、取組が不足している分野や項目の存在に気付きやすくなります。

参考:日本版持続可能な観光ガイドライン(JSTS-D) (2020年/観光庁・UNWTO駐日事務所)
https://www.mlit.go.jp/kankocho/topics08_000148.html

以上のとおり、確かにサステナブル・ツーリズムにおいて考慮すべき範囲は非常に広く、一朝一夕に実現できるものではないかもしれませんが、あまり難しく考えず、「とりあえずは、できるところから」やってみるという意識で取り組んでいきましょう。

本書では、サステナブル・ツーリズムの推進につながる取組の一例として、SDGsスタディツアーの造成・実施という手段をご紹介します。SDGsスタディツアーでは、地域の魅力や課題をSDGsの観点から整理して参加者に伝えることで、一般の観光ツアーよりも対象地域を深く知っていただくことができます。特に小中高生や親子をターゲットとすると効果的です。その理由や期待効果など、詳しい内容は次のページ以降で紹介していきます。



コラム① 「サステナブルな旅」への高いニーズ

宿泊予約サイトのブッキング・ドットコムは2023年2月、日本を含む世界35カ国・地域の約3万3300人に対してサステナブルな旅行に関する調査を行いました。

この調査では「今後12カ月以内に予定している旅行を、よりサステナブルにしたい」という回答が全体の76%を占めました。サステナブルな旅へのニーズが高まっていることが読み取れます。

また、75%の旅行者が「現地の文化を代表するような本格的な体験を楽しみたい」と回答した一方で、40%が「現地のコミュニティに還元できるツアーやアクティビティをどこでどう探せばよいか分からない」と回答しました。この結果から、地域を深く学び、地域に還元できる観光コンテンツへのニーズが世界的に高く、それらを適切に提供・発信できれば旅行先として選ばれやすくなると考えられます。

参考:サステナブル・トラベルレポート2023(2023年7月/Booking.com)
<https://prt-times.jp/main/html/rd/p/000000328.000015916.html>

🌀 なぜSDGsスタディツアーなのか？

POINT



SDGsスタディツアーの期待効果

- SDGsを切り口とすることで、地域のことを多様な視点から深く理解できる
- 地域の魅力だけでなく課題もコンテンツ化できる
- 参加者が地域の魅力や課題を深く理解し、地域の関係人口につながる
- 地域資源や地域の取組をSDGsの文脈で整理でき、旅行者への説明・発信も可能になる
- サステナブルな旅を求める旅行者へ訴求する
- 参加者からのフィードバックが、地域関係者へ刺激や発見をもたらす

小中高生をターゲットにする期待効果

- 学校現場でSDGs教育のニーズが高まっており、教育旅行や校外学習の需要が期待できる
- 若年層の関係人口の獲得につながる。子供視点からの新たな発見も

SDGsスタディツアーの期待効果

①SDGsを切り口とした地域理解

SDGsは17の目標と169のターゲットからなり、環境・文化・経済などの多様な側面から地域の魅力や課題を考えるのに役立ちます。また、SDGsというフレームを通して地域を見ることで、注目されていなかった持続可能な取組や課題などを見つけることができます。

このように、SDGsは地域のことを多様な視点から深く理解するのに役立つ切り口であり、スタディツアーとの相性が非常によいといえます。

②課題のコンテンツ化

SDGsスタディツアーでは、地域の魅力(例:美しい海)だけでなく、課題(例:ゴミの多い海岸)もコンテンツにすることができます。地域の魅力や先進的なSDGsの取組を見せるツアーもよいですが、地域の課題をありのまま参加者に共有して一緒に解決策を考えてもらう課題解決型ツアーも、SDGsスタディツアーの一種です。

つまり、これまで観光地ではなかった地域でも、SDGsスタディツアーの舞台になり得るのです。

③参加者の関係人口化

SDGsスタディツアーでは、地域の魅力や課題をSDGsを切り口にして学ぶため、一般的な観光ツアーよりも参加者に地域のことを深く理解してもらえます。それにより、ツアー後も参加者が地域のファンや関係人口として、地域に関わり続けてくれる確率が高まるということが期待できます。

④地域の魅力や課題をSDGsの文脈で整理

SDGsスタディツアーは、造成の過程から、地域関係者に良い効果をもたらします。これまで当たり前が存在していた地域資源や取組を、参加者に向けてSDGsの文脈で説明できるよう準備することで、地域関係者自身がその価値や意義を再発見することができます。

また、地域課題がまだ整理できていない地域においては、SDGsスタディツアーを造成する過程で、SDGsの観点から自地域の課題を認識・整理することができます。

⑤サステナブルな旅を求める旅行者への訴求

地域関係者自身が地域資源の価値や取組の意義をSDGsの文脈で説明できるようになれば、SDGsスタディツアーに留まらず、その後の情報発信にも大いに役立ちます。サステナブルな旅を求める旅行者への訴求も上手にできるようになり、良質な顧客層の獲得にもつながることが期待できます。

⑥参加者からのフィードバックがもたらす刺激や発見

ツアー参加者の反応や発言は、取組への自信や、取組のさらなる改善を促し、ひいては地域関係者のシビックプライドを高めることにつながります。

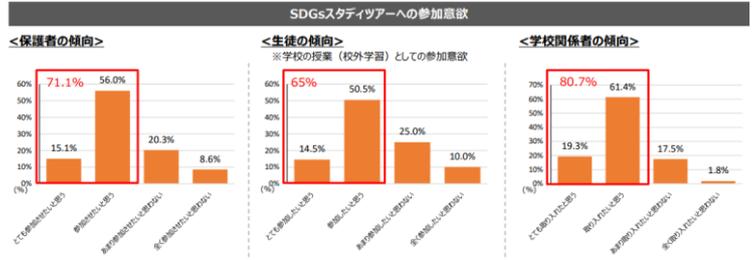
また、地域外からの参加者の意見からは新たな発見が得られるかもしれません。地域に身を置く立場からは提起しにくい課題を、参加者の口から率直に指摘してもらうことで、地域関係者で課題認識を共有し、解決に取り組む機運を生み出すこともできます。

小中高生をターゲットにする期待効果

①教育旅行や校外学習の需要獲得

2020年度の改訂学習指導要領では、「持続可能な社会の創り手」の育成が明記され、SDGsが各科目の教科書で取り上げられるようになりました。また、「主体的、対話的で深い学びの授業改善」が掲げられ、「探究学習」が重視されるようになり、「総合的な学習(探究)の時間」という授業が設けられました。正解が一つではない課題を多角的に考えることが求められ、校外学習などの教育旅行にも「探究学習」の要素が求められています。

SDGsスタディツアーは、こうした教育現場の最新トレンドに合致するものであり、高い需要が見込めます。実際、本事業で実施した調査によれば、小中高の学校関係者の81%、保護者の71%、生徒の65%が、SDGsスタディツアーへの参加に対して意欲的という結果が見られました。また、都内近郊の小中高の教育旅行を担当する旅行会社の約9割が、「担当校の校外学習や修学旅行でSDGsスタディツアーを提案したい」と回答しています。

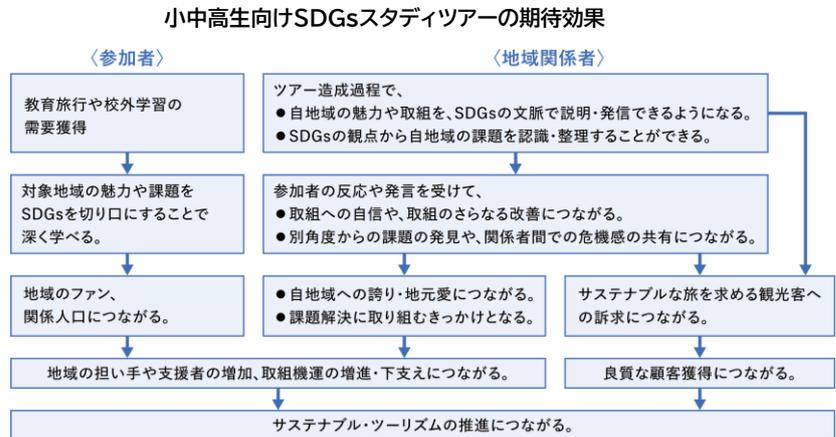


SDGsスタディツアーへの参加意欲
出典:「地域のサステナブル・ツーリズム推進事業」調査結果報告書(2023年2月/東京観光財団)

②若年層のファンや関係人口の獲得

小中高という多感な時期にSDGsスタディツアーに参加して地域を深く学んでもらうことは、参加者自身のみならず、地域にとっても良い効果があります。子供からの素直なリアクションや率直な感想は、地域関係者の励みや気付きになります。また、息の長いファン・関係人口づくりにもつながりますし、地元の学校の校外学習として実施すれば、子供たちの地元理解やシビックプライドを高めることにもつながります。そうした効果により将来的に参加者の中から移住者や地域の担い手が出現することも期待できます。

このようにSDGsスタディツアーを小中高生向けに造成・実施すると、地域のサステナブル・ツーリズム推進につながる多くの効果が期待できます。取り組んですぐ得られる効果もあれば、中長期的に関係人口増やシビックプライドの醸成などでサステナブル・ツーリズム推進を下支えする効果も期待できます。まとめると右図のようになります。



コラム② SDGsの取組が遅れている地域でも、SDGsスタディツアーはつくれる。

SDGsスタディツアーという言葉の印象から、「SDGs先進地域でしかつけれないツアーでは？」と思われるかもしれませんが、決してそんなことはありません。SDGsスタディツアーには大きく分けて、2パターンがあります。

- ①地域の先進的なSDGsへの取組を学ぶツアー
- ②地域の課題を題材にSDGsへの取組の必要性を学ぶツアー

どちらも、小中高生の参加者にとっては学びが多く、地域にとっても子供たちの発言に勇気をもらったり、新しい取組につながるといった効果が期待できるツアーとなります。「自分たちの地域はSDGsへの取組が遅れているから、SDGsをテーマとしたコンテンツには手が出せない」などとは考えず、むしろそういった地域こそ、SDGsスタディツアーをきっかけとして、SDGsへの取組や地域の理解を加速していただきたいと思います。

SDGsスタディツアーとは？

日本各地のSDGsスタディツアー

準備編

造成編

実践編

今、日本のさまざまな地域でこれまで観光に活用されてこなかった地域資源(魅力だけでなく課題も含む)を、SDGsが学べる観光コンテンツやツアーへと磨き上げる取組が増えていきます。その多くはこれまであまり観光とは縁のなかった事業者と、観光振興を担う地域の組織とが連携して造成しています。

ここでは、新たな客層誘致やマネタイズの手法など、地域経済の活性化や持続可能な地域づくりを狙いとした4つの事例を紹介します。

1

富山県富山市

取組主体 富山市



伝統木工技術「組子」制作体験と工場から生まれる環境活動を学ぶ

富山市では、伝統木工の会社「株式会社タニハタ」と協力し、修学旅行生向けにSDGsを学べるプログラムを開発しました。環境に配慮したものづくりを見学・体験することでSDGsについての理解を深められるプログラムです。

伝統木工の「組子(くみこ)」制作を体験し、環境保全に配慮したものづくりが学べます。

ツアー内容

- ◆ プログラムを実施するタニハタは、日本の伝統木工技術「組子」を駆使して木製建具を製作している会社です。「組子」とは、釘を使わずに木を幾何学的な文様に組み付ける木工技術のことで、飛鳥時代から引き継がれてきました。
- ◆ ツアーではスタッフが工場での組子づくりの様子を案内し、参加者は伝統的なものづくりと環境に配慮した取組をSDGsと紐づけて学ぶことができます。工場見学後は組子の制作体験を行います。



「富山市で学ぶSDGs教育旅行」パンフレットより



関連するSDGs



組子体験を通じて、タニハタの地球温暖化対策への工夫を学びます。例えば製作に必要な電力には、太陽光や水力などでつくられた自然エネルギーを100%活用しているほか、組子加工の際に発生する端材を工場内で圧縮加工し、暖房の燃料として使用することで木を無駄なく使い切る工夫をしています。これはSDGs7番「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」やSDGs12番「つくる責任 つかう責任」、SDGs13番「気候変動に具体的な対策を」に関連します。

このような環境に配慮した手仕事によるものづくりは、職人の技術向上やエコへの意識向上にもつながり、社員みんなが「環境」を意識し行動する社風が生まれています。これはSDGs8番「働きがいも経済成長も」やSDGs17番「パートナーシップで目標を達成しよう」に関連しています。

地域に根ざした産業の生業をそのまま見せる

富山市で伝統木工を営む中小企業のものづくりと、環境保全に配慮した取組がそのままツアーの素材となっています。これまで観光に関わりがなかった事業者と協力して、産業や伝統工芸をテーマにしたSDGsスタディツアーをつくっている点で参考になる事例です。

受入回数や人数の上限を決め、本業に負担のかからない運用

受け入れるのは修学旅行の小グループで1団体最大20名、月に2団体までと上限を決めています。事前にルールを決めることで、本来の業務に支障がなく、無理なく継続的な受入が可能な運用となっています。

事前・事後学習の教材づくりを市の観光担当部署が支援

受入事業者側でのガイディングの負担を減らしつつ、子供たちの理解度を高めるために、プログラム内容に沿ったワークシートを富山市が制作し学校側に提供することで、事前・事後学習を学校独自でも行えるようにしました。

造成の工夫

- ◆ 事業者や学校が事前・事後学習の教材を用意せずに済むよう、富山市がワークシートを作成しました。企業のプロフィールや環境保全の取組などが書かれ、限られた時間の中で受入事業者側では説明しきれない点も解説しています。
- ◆ 受入事業者がSDGsの観点から説明案内ができるよう、市の観光担当部署が事業者ごとの個別のガイドシナリオを作成したほか、ガイド講座も行いました。



市が作成したワークシート

関係者の役割分担



富山市

- 2021年度に、行政視察を修学旅行生向けにアレンジした12の教育旅行プログラム「富山市で学ぶSDGs教育旅行」をつくりました。タニハタのプログラムはその中の一つです。
- 「富山市教育旅行誘致推進事業」として委託先の旅行会社とともに、学校向けの事前・事後学習教材として、12プログラムの個別ワークシートと共通ガイドブックをつくりました。

株式会社タニハタ

- 工場見学と組子づくりの体験を組み合わせたプログラムを実施します。プログラムでは受入事業者の社員がガイドを行っています。
- 参加希望者からの問合せと予約を受け付けています。



市で作成したガイドブックの表紙(上)
プログラムごとにとのSDGsと関連が深いかを紹介(下)

ツアー DATA

- ・実施時期： 通年
- ・所要時間： 90分
- ・対象： 小学生～高校生
- ・定員： 10～20名
- ・申込窓口： (株)タニハタ
- ・料金： 1,000円/人
- タニハタ公式サイト： <https://www.tanihata.co.jp>
- 富山市「富山市で学ぶSDGs教育旅行」掲載サイト：
<https://www.city.toyama.lg.jp/business/shokogyo/1010599/1005772.html>

SDGsスタディツアーとは?

日本各地のSDGsスタディツアー

準備編

造成編

実践編



「釜石の出来事」を紐解く津波「避難路追体験」

かまいしDMCでは、釜石のまち全体を「屋根のないミュージアム」に見立て、地域の日常生活や仕事を紹介するさまざまな体験型プログラムを開発しています。その一つが東日本大震災の経験を生かした防災関連プログラムです。

東日本大震災でほぼ全員生還した小中学生の避難道を歩き、防災について学びます。

ツアー内容

- ◆ 2011年に発生した東日本大震災では、岩手県釜石市北部の海に面した住宅街、鶴住居(うのすまい)地区でも津波により多くの方が命を落としました。しかし、この地区の小中学生は震災の発生直後に海岸近くにあった学校から高台へと避難したため、当日、学校管轄下にあった児童・生徒は全員が生還し、99.8%の高い確率で震災を生き抜くことができました。
- ◆ その背景には、震災以前から地域で行われていた防災教育があります。このツアーでは小学校と中学校があった場所から高台に至る約1.6kmの避難道を歩き、なぜ生徒たちは無事に避難できたのか、当日の判断の分かれ目や震災前から行われていた防災教育の内容を学びます。実際に震災を体験した「いのちをつなぐ未来館」の職員が語り部ガイドとして同行し、実体験に基づいた震災当日の生徒たちの避難の様子を伝えています。



プログラム(避難路追体験)の様子



いのちをつなぐ未来館/岩手県釜石市



関連するSDGs



被災地で震災当時の状況を知り、地域に根付いた防災教育を知ることで、ツアー参加者は自分事として防災について学ぶことができます。災害対策について学び、自分たちにできることを考えることはSDGs11番「住み続けられるまちづくりを」に関連します。

目立った観光資源がなくてもツアー造成が可能

当時、釜石市は目立った観光資源が少ない地域でしたが、「釜石オープン・フィールド・ミュージアム」をコンセプトに住民の暮らしや生業を観光の素材として磨き上げました。避難路という場所も、一般的には体験プログラムの舞台になるとは考えにくい素材ですが、地域固有のストーリーを付加することで、全国の学校から申込が集まるようになりました。目立った観光資源が少ない地域でSDGsスタディツアーをつくる際の参考になる事例です。

目には見えない地域の教訓を参加者に伝える

このプログラムには東日本大震災での地域住民の経験と、震災以前から行われてきた地域の防災教育が、そのまま生かされています。目に見える観光資源でなくても、地域で受け継がれている貴重な教訓などは、言語化して整理し、ガイドを工夫することでSDGsスタディツアーの素材になり得ます。

造成の工夫

- ◆ 震災関連のプログラムについて、当初は「震災関連のことでお金をいただくべきでない」との声もありました。しかし、他県の人々が訪れ、体験し、学んでいく姿を見た市民からは次第にそうした声は薄れていき、支持されるようになりました。100%の合意形成は難しくとも、まずは取り組んでみることで、その実績を通じて市民との合意形成につなげました。



関係者の役割分担



株式会社かまいしDMC

- ・ かまいしDMCは2018年に設立された観光地域づくり法人(DMO)です。観光資源が少ない釜石で教育旅行をはじめとした観光客の誘致に成功し、サステナブル・ツーリズムに対する先進的な取組でも知られています。
- ・ 「釜石の出来事」を紐解く津波「避難路追体験」をはじめ、地域の日常生活や仕事を紹介するさまざまな体験・教育旅行プログラムを造成・展開しています。

いのちをつなぐ未来館

- ・ いのちをつなぐ未来館は震災後、三陸鉄道の鶴住居駅前につくられた震災伝承と防災学習のための施設です。
- ・ この施設には震災を体験した語り部ガイドが常駐しており、「釜石の出来事」を紐解く津波「避難路追体験」プログラムでもガイドを務めています。

うのすまいトモス

語り部（現地体験プログラム）

本プログラムは、震災を体験した語り部とともに、釜石東中学校・鶴住居小学校の児童生徒が当時避難した避難道を歩いたり、当時校舎があった場所である復興スタジアムを見学したりしながら、当時の出来事を肌で感じられる内容となっています。また「いのちをつなぐ未来館」の展示も、語り部の解説とともにご覧いただけます。1時間半コース（①か②のいずれかを選択）と2時間半コース（①②のどちらも）の2種類をご用意しています。

① 避難路追体験

鶴住居地区で多くの方が亡くなった一方で、その地区の小中学生のほとんどが生還した経緯から、児童生徒の避難の過程は、賞賛されるまでに至りました。しかし、その当日の避難の実態としては、さまざまな困難に直面しつつも、それを乗り越えて、なんとか生還できたと言った方が適切かもしれません。

本プログラムでは、その舞台となった鶴住居小学校と釜石東中学校があった場所から、高台への避難の道を参加者の皆様と歩きながら、当日の出来事や避難所での生活について、お話しできたらと思っています。

② 釜石鶴住居復興スタジアム見学

「釜石鶴住居復興スタジアム」は鶴住居の復興の象徴と言える存在です。本プログラムでは、震災や建設のエピソードをお話することに加えて、内部（ロカールームなど）までご覧いただけます。釜石市は歴史的にラグビーが非常に盛んで、2019年には記憶に新しいラグビーのワールドカップの試合も、このスタジアムで行われました。現在は、実業団チーム「釜石シーウェーブスRCF」もこのフィールドを使用しています。展示室では、釜石にゆかりのあるラグビー選手に加え、過去にお越しいただいた著名人のサイン等もご覧いただけます。

※本プログラムでは、グラウンドには立ち入りいただけません。※お天候都合によるキャンセルがあった場合は、キャンセル料が発生いたします。

詳しい料金・申込方法に関しては、ホームページに掲載の「申込要項」および「申込書」をご参照ください。

現地体験プログラム概要

ツアー DATA

- ・実施時期：通年(水曜日以外)
- ・所要時間：60～90分
- ・対象：小学生以上
- ・定員：30名
- ・申込窓口：かまいしDMC
- ・料金：11,000円～(基本料金 10,000円 参加費 1,000円/人)
- かまいしDMC公式サイト：<https://visitkamaishi.jp>
- かまいしDMC「釜石の出来事」を紐解く津波「避難路追体験」プログラム掲載サイト：<https://visitkamaishi.jp/program/accident-prevention/2007/>



四万十川とトンボから考える「自然」と「人」との共生のかたち

高知県西南部の観光振興に取り組む地域連携DMOの幡多(はた)広域観光協議会が域内の四万十市で活動する自然保護団体「トンボと自然を考える会」と連携し、プログラムを造成しました。自然保護地区を学びの素材として活用し、そこから得た収益を保全に役立てる好循環を目指しています。

里山の身近な生物や作物を例に、環境の変化や課題を多角的に学べるプログラムです。

ツアー内容

- ◆ 「そっとしておけば優れた自然環境はずっと良好な状態が保たれる」と思われていますが、実は、生物多様性に優れた日本の里山環境は、人の手を加えることが不可欠です。地域に多く生息するトンボを題材に、そのことを学ぶのが本プログラムの目的です。
- ◆ 実施場所である四万十川の近くの「トンボ王国」は、約80種のトンボが見つかったトンボ保護区の名前です。この保護区は「公益社団法人トンボと自然を考える会」が管理しており、年間を通じてトンボたちが住みやすい環境づくりをしています。
- ◆ プログラムの企画造成とガイドは、地域の生態系の課題について理解している「トンボと自然を考える会」が主体となって行っています。季節ごとに異なるフィールドワークを行い、トンボや地域で育つ作物など身近な例をもとに、地球温暖化などの影響によって一見豊かな自然環境や生態系の中身が、実は大きく変化していることを、SDGsの観点を加えて説明しています。



プログラムの様子



関連するSDGs



多種多様なトンボが住み続けるためにはどのような自然環境が必要なのか、トンボ王国ではどのような工夫がされているのかをフィールドワークや座学を通じて学びます。このように里山の生態系の保全について学び、方法を考えることはSDGs15番「陸の豊かさを守ろう」に関連します。

身近な里山から自然環境の維持の大切さを学ぶ

里山の自然環境の維持には人の手を加えることが不可欠ということを里山の生態系から学ぶプログラムは、元々地域にある施設や環境を活かして造成されました。東京都内にあるホテルが棲む池、サギやカワセミが飛来する川などの身近な里山を題材にしたSDGsスタディツアーをつくる際に参考になる事例です。

地元の自然を保護する団体が案内役を務め、日頃の活動を共有

地元で自然保護活動を行う団体がツアーの案内役を担い、日頃の活動で得た知識や課題を参加者に伝えています。都内の里山環境でもNPOや地域住民が手入れをしているケースが多く、そうした取組がSDGsスタディツアーの素材になるという事例です。

造成の工夫

- ◆ フィールドワークの前後に座学の時間を設け、後半では参加者が感想や「未来に向けて自分は何ができるか」という考えを発表する機会を提供することで、主体的な学びにつなげています。
- ◆ 自宅や学校の授業で事前・事後学習ができるよう、専用教材「自分で作る未来のノート」をプログラムの参加者に限定配布しています。
- ◆ 参加費の一部は、トンボ保護区を守る活動に寄付されます。参加者が持続可能な地域づくりに参画できる仕組みといえます。



参加者のみに配布される専用教材

関係者の役割分担



一般社団法人幡多(はた)広域観光協議会

- 高知県西南部の幡多地域3市2町1村(四万十市、宿毛市、土佐清水市、黒潮町、大月町、三原村)の面的な観光促進を目指して2010年に発足し、2019年に地域連携DMOに登録しました。
- 四万十・足摺エリアの豊かな山・川・海の自然環境と生物多様性の持続可能な保全と活用を図るため、「観光×SDGs」をコンセプトに、地域の事業者と『主体的・対話的で深い学び』体験プログラムを開発しました。
- すべてのプログラム共通の専用教材「自分で作る未来のノート」を作成しました。
- モニターツアーを数回実施し、ガイドの説明内容のブラッシュアップを行いました。
- 周知・販売のためタリフ^(注)やPR動画を制作し、学校団体向けにプロモーションを行っています。

(注)タリフ: ツアー・プログラムの料金や行程、催行人数、予約問合せ先などの情報を分かりやすくまとめた資料(詳細はP.37参照)

公益財団法人トンボと自然を考える会

- 「トンボ王国」は、四万十川の近くにある「トンボ自然公園」と、国内・海外のトンボと魚を飼育展示する公園内の自然博物館「四万十川学遊館」で構成されています。
- この「トンボ王国」の指定管理団体であり、自然保護活動を行っているのが「トンボと自然を考える会」です。季節ごとに異なるフィールドワークなど、プログラムの内容や構成について考案し、ガイド役もを行います。



幡多広域観光協議会が作成したタリフ

ツアー DATA

- ・実施時期：通年
- ・所要時間：3時間
- ・対象：小学生～高校生
- ・定員：20～80名
- ・申込窓口：(一社)幡多広域観光協議会
- ・料金：3,500円/人
- ・トンボ王国公式サイト：<http://www.gakuyukan.com/>
- ・幡多広域観光協議会 四万十川とトンボから考える「自然」と「人」との共生のかたちプログラム掲載サイト：<https://koiki.hata-kochi.jp/experience/91>

SDGsスタディツアーとは？
日本各地のSDGsスタディツアー
準備編
造成編
実践編



漁師による見せる漁業&食べる磯焼け対策 海遊記&そう介(すけ)プロジェクト

対馬グリーン・ブルーツーリズム協会(事務局運営法人:一般社団法人対馬里山繋営[けいえい]塾)は、島の課題をテーマにした観光プログラムを開発しています。海水温の上昇によって発生する“磯焼け”を題材とした「漁師による見せる漁業&食べる磯焼け対策 海遊記&そう介プロジェクト」もその一つです。地域の水産加工会社である有限会社丸徳水産と協力して造成しました。

地域の課題「磯焼け」の現状と、原因の一つである食害魚の有効活用を学ぶプログラムです。

ツアー内容

- ◆ 対馬市では、約20年前から海藻の激減によって「磯焼け」という環境の悪化が進んでいます。その原因の一つがイスズミという魚による海藻の食害です。
- ◆ 海藻が大好物の食害魚イスズミに「そう介(すけ)」とあだ名をつけ、2021年から対策に乗り出したのが地元の水産加工会社の丸徳水産です。食用には向かないとされていたイスズミの美味しい調理法を開発して新たな水産資源として活用するとともに、島の課題を漁師の目線で案内するプログラムを造成しました。
- ◆ このプログラムでは漁師が自分の仕事を漁船で案内し、船上から見える島の環境の変化を解説します。参加者は漁師の普段の仕事ぶりや海藻が減っている様子を見学することで、水産資源の持続的な利用や環境保全と第一次産業の両立、地産地消の推進や雇用創出など、さまざまな課題について考える機会が与えられます。
- ◆ 昼食にはイスズミを使った料理が提供され、それを食べることもSDGs14番「海の豊かさを守ろう」の達成貢献につながっています。



プログラム中の餌やり体験、海中を覗く体験の様子



関連するSDGs



磯焼けという海の問題を漁師の目線で参加者に見せることで、海水温度の上昇がもたらす海洋生態系や漁業への影響を体感することができます。これらの状況を知り、自分たちができることを考えることはSDGs14番「海の豊かさを守ろう」に関連します。

地域の課題をありのままの姿で見せ、参加者と共有

地域が現在抱える「磯焼け」という問題をSDGsに紐づけ、ありのままの姿を参加者に提示し、課題意識を共有するツアーです。地域課題をツアーの素材として活かした好事例といえます。

既存の設備や空き時間を組み合わせた無理のない運営

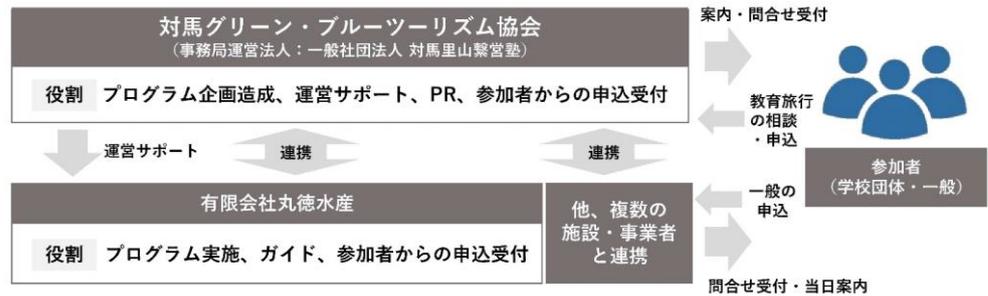
観光用の船やガイドを新たに用意するのではなく、漁師が普段使っている漁船を利用し、空き時間に案内することで、費用や人的負担を抑えています。また、漁師の副収入にもつながるため持続可能な取組となっています。

造成の工夫

- ◆ これまで観光に関わりのなかった第一次産業と連携し、地域の漁協や養殖事業者などを観光の担い手とすることで、本業の漁業以外に、副業として収益を得ることができ、地域全体にお金が落ちる仕組みを構築しています。
- ◆ 地域の環境問題を、参加者自身に「自分事」として捉えてもらえるような案内を心がけています。例えば、プログラム中に漂着ゴミを発見したときには、どこから流れてきたゴミなのかを参加者に考えさせるような問いかけをしています。



関係者の役割分担



対馬グリーン・ブルーツーリズム協会

- ・ 対馬市の農林漁業体験活動を推進する組織で、2020年に地域限定旅行業に登録しました。
- ・ 対馬でSDGsを学ぶプログラムを教育旅行向けにタリフ化し、販売を予定しています。
- ・ 教育旅行や企業研修としてツアーが行われる場合は、漁師のガイド内容に地域の目指すものやSDGsに紐づけた学びの補足説明をしてサポートを行っています。

有限会社丸徳水産

- ・ 観光プログラムを企画造成して実施しているほか、一般旅行者からの申込を直接受けています。
- ・ 漁業の空き時間を利用して、漁船を使用し、漁師自身が日常の漁の様子や海の問題を伝えるガイドを担っています。

04 漁師による見せる漁業&食べる磯焼け対策
海遊記&そう介プロジェクト

キーワード 暮らし・自然・保全 | 美津島町久須保668

体験内容
海の砂漠化現象と言われる「磯焼け」が深刻化している対馬。そこで始まった、海洋環境保全の取り組み「そう介プロジェクト」に参加します。地元漁師の船に乗せてもらい、資源管理を行う生簀や、海藻のない海を見学します。陸上では、岸壁から釣りをしたり、磯焼けの原因の一つとされている食害魚、イソズミの箱内魚物の認知などを行います。最後にイソズミを使った料理を食べ、プロジェクトを応援しましょう！

学習テーマ
対馬が抱える海の問題と、漁師たちの取り組みから、水産資源の持続的な利用について考えます。環境保全と第一次産業の両立・地産地消の推進・雇用の創出など、様々な角度から取り組みの意義を考えます。

モデルプラン

時間	所要時間	内容
9:00	30	「丸徳水産」専務より講話
9:30	2:00	・海上クルーズ(磯焼け、マダコ釣や釣り体験、磯焼け現場の見学 など) ・釣り体験
11:30	30	移動
12:00	1:00	昼食(磯焼け対策メニュー)

Point
磯焼けの原因の一つに、食害魚イソズミによる食害があげられます。食用には向かないとされていたイソズミに「そう介」の名前を付け、おいしい料理を開発して「食害魚産」。食べれば食べるほど海洋環境保全の一助になります。もともと温かい地域に生息していたイソズミ。地球温暖化の影響で生息域が北上し、対馬でも増えてまいりました。悪者と思われがちですが、彼らも被害者なのです。事実や現状を正しく理解し行動する、消費者責任について考えることができますでしょう。

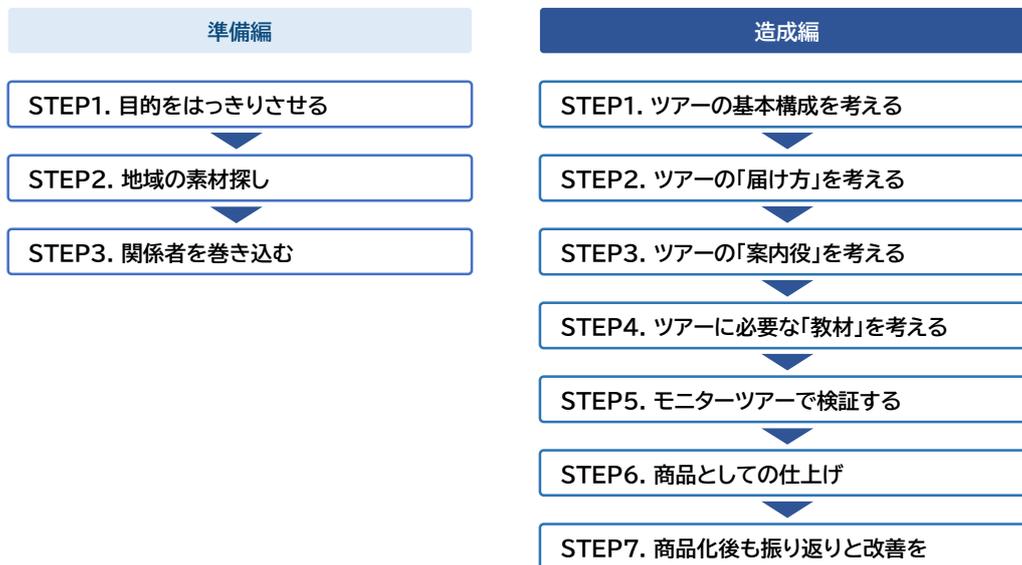
「対馬でSDGsを学ぶ教育旅行向けプログラム」のタリフ

ツアーDATA

- ・実施時期：通年
- ・所要時間：2時間(昼食時間除く)
- ・対象：小学生以上
- ・定員：2～37名
- ・申込窓口：丸徳水産または対馬グリーン・ブルーツーリズム協会
- ・申込期限：実施日の1ヶ月前
- ・料金：7,500円/人(昼食代別) ※最少催行人数2名
- 丸徳水産「そう介プロジェクト」公式サイト：<https://www.marutoku-kitchen.com>
- 対馬グリーン・ブルーツーリズム協会公式サイト 海遊記ページ：<https://tsushima-gbt.com/natures/5558>

準備編/造成編/実践編の使い方

- SDGsスタディツアーのつくり方を、準備編(3STEP)と造成編(7STEP)の2つのフェーズに分けて順番に説明します。準備編ではSDGsスタディツアーをつくる際の心構えや下準備について、造成編はツアーを実際につくる際に必要となる具体的な取組について説明します。



- 実践編では、本事業で実際にSDGsスタディツアーをつくった都内3地域(墨田区、多摩市、式根島)での具体的な取組事例をご紹介します。また、準備編及び造成編の途中でも、都内3地域での取組事例のうち関連する要素を抜粋して例示しています。
- SDGsスタディツアーは、地域の事業者(受入事業者)や、民間の旅行会社などが主体となって造成することも可能ですが、本書は都内の観光協会等(観光協会、区市町村の観光課など)向けとして、各STEPの旗振り役は観光協会等が担うことを想定しています。



参考文献

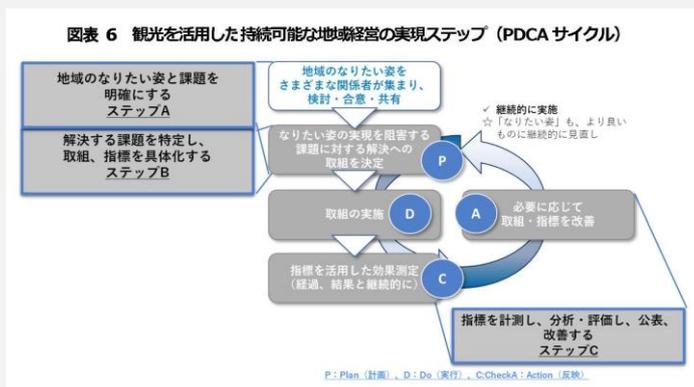
「観光を活用した持続可能な地域経営の手引き」

(2022年/運輸総合研究所・UNWTO駐日事務所)

https://www.ittri.or.jp/kanko_tebiki.pdf

この手引きでは、観光を活用した持続可能な地域経営の実現ステップ(PDCAサイクル)が解説されています(下図参照)。観光を活用した持続可能な地域経営(本書においては「サステナブル・ツーリズム」と同義として扱います)は単一組織・単一事業だけで実現できるものではなく、この実現ステップに沿って地域一体となって取り組んでいくことが望まれます。

本書の準備編と造成編は、この手引きをベースとしながらSDGsスタディツアー特有の造成ノウハウや留意点に特化した内容となっています。また、準備編STEP1では、どのステップでSDGsスタディツアーが役立つのかについても説明しています。本書とあわせてこの手引きもお読みいただき、適切にPDCAサイクルを回すことで、SDGsスタディツアーをより効果的に持続可能な地域経営に活用することができるでしょう。



出典:「観光を活用した持続可能な地域経営の手引き」P.12



SDGsスタディツアーを つくろう。

3 準備編～SDGsスタディツアーをつくる前に

STEP1. 目的をはっきりさせる	16
STEP2. 地域の素材探し	17
STEP3. 関係者を巻き込む	18

4 造成編～SDGsスタディツアーをつくろう

STEP1. ツアーの基本構成を考える	21
STEP2. ツアーの「届け方」を考える	26
STEP3. ツアーの「案内役」を考える	28
STEP4. ツアーに必要な「教材」を考える	30
STEP5. モニターツアーで検証する	34
STEP6. 商品としての仕上げ	36
STEP7. 商品化後も振り返りと改善を	38

5 実践編～SDGsスタディツアー実施レポート

case1 墨田区	40
case2 多摩市	44
case3 式根島	48

SDGsスタディツアーをつくり始める前の重要な準備として、①目的をはっきりさせる、②地域の素材探し、③関係者を巻き込むという3つのSTEPを紹介します。

STEP1. 目的をはっきりさせる

POINT



- 地域の希望や課題を踏まえて、具体的な目的を立ててみる
- 「観光を活用した持続可能な地域経営の実現ステップ」上の位置づけを意識する

地域の希望や課題を踏まえて、具体的な目的を立ててみる

地域関係者からの協力を得て、SDGsスタディツアーを継続的に実施していくためには、サステナブル・ツーリズムを推進するという抽象的な目的だけでは不十分で、もっと具体的な目的が必要です。

例えば、

- ・ 教育旅行の需要を獲得したい。
- ・ 地域内の〇〇という施設への子供や親子の来訪を増やしたい。
- ・ 地域の〇〇という課題自体を商品化したい。

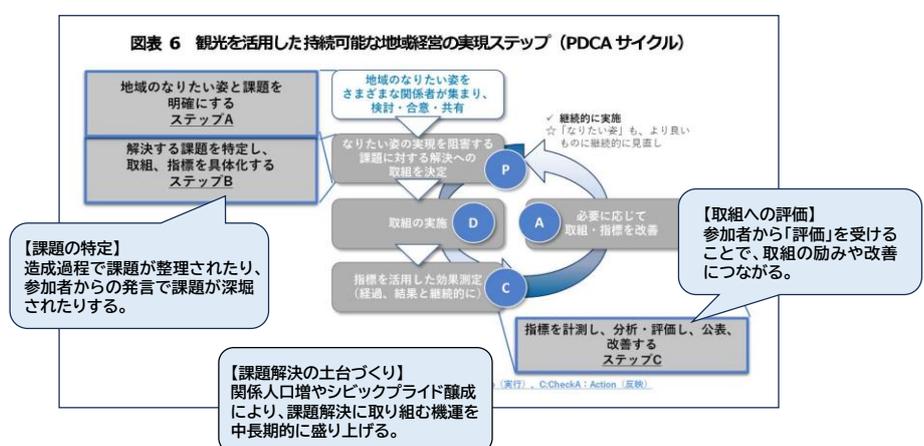
といったように、地域側の都合や希望に基づいた目的で構いません。地域関係者が普段から抱いている課題意識をベースに目的を設定した方が、取組への求心力を保ちやすいと言えます。地域関係者のモチベーションにつながり、継続的に実施したくなる目的を立てることがとても大切です。

「観光を活用した持続可能な地域経営の実現ステップ」上の位置づけを意識する

自分の地域におけるサステナブル・ツーリズム推進のステップの中で、SDGsスタディツアーがどのように役立つのかも意識してみてください。

地域としてサステナブル・ツーリズムを効果的に推進するには、P.14で紹介した「観光を活用した持続可能な地域経営の手引き」のステップを意識して地域経営に取り組む必要があります。この実現ステップの中でSDGsスタディツアーは、下図のように「課題の特定」「課題解決の土台づくり」「取組への評価」といった場面で役立つと考えられます。

自分の地域の現在地がこのステップのどこなのかにより、SDGsスタディツアーに期待する役割は変わってきます。「観光を活用した持続可能な地域経営の手引き」を読み、自分の地域の現在地を把握し、SDGsスタディツアーに何を期待するのかを考えてみましょう。



出典:「観光を活用した持続可能な地域経営の手引き」P.12



本事業での実践事例より

本事業でSDGsスタディツアーづくりに取り組んだ都内3地域においては、サステナブル・ツーリズム推進の上で、SDGsスタディツアーに対し主に以下のような役割を期待しました。

墨田区(P.40参照)

【取組への評価】

墨田区におけるSDGsの取組やサステナブルなものづくりを参加者に知ってもらい、反応を得ることで、取組の励みや新たな気付きを得ること。

多摩市(P.44参照)

【課題解決の土台づくり】

多摩センターの魅力を、歴史や背景も含め深く理解できるツアーをつくることで、地域のファンや住民のシビックプライドを醸成し、中長期的に街を盛り上げる担い手を増やすこと。

式根島(P.48参照)

【課題の特定】

少子高齢化、海ごみ、台風災害といった島が抱える問題を参加者にも一緒に考えてもらうことで、課題の深掘りや新たな気付きを得ること。



コラム③ サステナブル・ツーリズムのどの段階に着目するか？

一口に「サステナブル・ツーリズムにつながる取組」といっても、着目する段階により内容やレベルは大きく異なります。例えば、旅行によるCO₂排出量削減やプラスチックごみ・食品ロスの削減といった課題解決に具体的に取り組む段階や、その効果検証の段階がある一方で、その実現のための手段・方法を考えたり、旅行者の来訪が地域にどのような影響を及ぼすのか全体像を把握する段階もあります。

SDGsスタディツアーを通して、地域文化が継承されてきた背景を探ったり、産業(農林漁業や商業など)と地域との関わりに着目するなど、地域が持続可能となる要素を考えることも、「サステナブル・ツーリズムにつながる取組」といってよいでしょう。

STEP2. 地域の素材探し

POINT



- ポジティブな地域資源も、ネガティブな地域課題も、どちらも素材になる
- 地域課題の解決手段を参加者に考えてもらう「課題解決型ツアー」という形式も
- 既存の観光プログラムやツアーにSDGs学習の要素を加えてリメイクしてもよい
- 素材候補に目星をつける。具体的な絞り込みは関係者と一緒に行うのが理想

SDGsスタディツアーに取り組む目的を明確にしたら、次に、ツアーの素材探しをします。

ポジティブな地域資源も、ネガティブな地域課題も、どちらも素材になる

一般的な観光ツアーでは、参加者に楽しんでもらうために、ポジティブな地域資源(例:美しい海や川、地産地消の先進的な取組など)を素材として組み合わせることが多いでしょう。一方でSDGsスタディツアーでは、参加者の学びになるものなら何でも素材になり得ます。ポジティブな地域資源はもちろんですが、ネガティブな地域課題(例:ゴミの多い海岸、後継者不足の地場産業など)も素材として使えるのがSDGsスタディツアーの特長です。

地域課題の解決手段を参加者に考えてもらう「課題解決型ツアー」という形式も

地域課題の解決に向けた取組ができていなくてもSDGsスタディツアーはつくれます。対応方法に悩んでいる地域課題を、ありのまま参加者に共有し、解決手段を考えて発表してもらうツアーに仕立てれば、参加者のアイデアから解決の糸口が見つかるかもしれません。参加者にとっても、答えのない地域課題について考えることは、実践的かつ主体的にSDGsを学べる貴重な機会となります。

既存の観光プログラムやツアーにSDGs学習の要素を加えてリメイクしてもよい

既に地域で実施している観光ツアーに、SDGs学習の要素を加えて、SDGsスタディツアーとしてリメイクするのもよいでしょう。ゼロから造成するよりも、運営体制が確立されている既存プログラムを発展させる方が造成の難易度は下がり、ツアーの継続もしやすいと考えられます。ツアーの立ち寄り先や体験コンテンツは一般旅行者向けと共通にしつつ、学校向けにはSDGs学習要素をオプションとして追加提案できるように用意しておけば、より幅広い需要に対応できます。



本事業での実践事例より

墨田区 (P.40参照)

- 墨田区観光協会では、修学旅行をはじめとした教育旅行コンテンツとして、地域の伝統工芸や地場産業を見学・体験できるプログラムを以前から実施している。
- 近年、学校側からSDGsや探究学習プログラムの要望が増えてきた。そこで本事業にて、既存プログラムにSDGsの探究学習要素を追加し、SDGsスタディツアーとしてリメイクした。



素材候補に目星をつける。具体的な絞り込みは関係者と一緒に行うのが理想

以上のようなポイントを踏まえて、SDGsスタディツアーに使いそうな素材を洗い出してみましょう。

まずは、複数人でブレインストーミングを行い、思いついた素材をホワイトボードや付箋にどんどん書き出していきます。この段階では運営面の制約などは気にせず、思いついたことを自由に書き出すことが大切です。

素材を一通り書き出したら、次に、「それらの素材を組み合わせるとどんなツアーがつくれそうか？」というアイデアを出していきます。まだこの段階でも制約などは気にせず自由に発想していきましょう。ただし、STEP1で明確にした具体的な目的(何のためにSDGsスタディツアーをつくるのか?)は意識するようにしてください。

こうした作業に取り組むことで、SDGsスタディツアーに使いたい素材と、その使い方のイメージが大まかにできるようになってきます。この段階で完璧に絞り込む必要はなく、素材候補にある程度目星をつけるだけで十分です。具体的なツアー構成の検討や素材の絞り込みは、この後のSTEPで地域関係者を巻き込みながら一緒に考えていく方が、関係者の納得感や意欲を高めやすく、より地域一体となった取組になるでしょう。

STEP3. 関係者を巻き込む

POINT



- 取り組む目的や意義を説明し、議論しながらアップデートする
- 「SDGs」という用語に抵抗感がある地域関係者には丁寧な説明を
- 区市町村とは密な連携を。観光担当者だけでなく、SDGs担当者との連携も
- 地域の学校を巻き込むのも効果的
- 専門家や専門事業者の力も借りる
- 継続実施を見据えつつ、「とりあえずは、できるところから」やってみる

SDGsスタディツアーの素材候補に目星がついたら、それらに直接携わっている地域関係者や、支援を仰ぎたい地域関係者に協力を呼び掛けていきます。

協力を呼びかける際は、次のような点に留意しましょう。

取り組む目的や意義を説明し、議論しながらアップデートする

単にツアーへの協力を呼び掛けるだけでなく、STEP1で明確にした目的(P.16参照)や、SDGsスタディツアーの期待効果(P.4参照)も含めて説明しましょう。その際、一方的に目的や意義を押し付けるのではなく、仮説として提示しつつ、地域関係者の意見を引き出して議論を深めるようにしてください。その結果を取り入れて、目的や意義をアップデートしていきましょう。

「SDGs」という用語に抵抗感がある地域関係者には丁寧な説明を

地域関係者の中には「SDGs」という用語に対し、抵抗感を持っている方もいると思います。

そうした方へいきなり「SDGsスタディツアーに協力してください」と呼び掛けると、ネガティブに受け止められかねません。最初は「SDGs」という用語は使わず、「地域の魅力や課題を子供たちに深く学んでもらうためのツアーをつくる」という趣旨を前面に出しつつ、その手段として「SDGsという切り口を活用する」ことを丁寧に説明するのがよいでしょう。

なお、ツアーの中で「SDGs」という用語を使用することは必須ではありません。ただし、近年は小学校の授業でもSDGsが必修化されており、子供たちからの認知度は非常に高い状況です。SDGsという共通言語をツアーに上手に取り入れることで、子供たちや学校からの関心を集めやすく、理解もされやすいという利点があります。ワンポイントアドバイス「SDGsに紐づけるメリットを素材提供者である事業者理解してもらおう」(P.23参照)の内容も参考にしてください。

区市町村とは密な連携を。観光担当者だけでなく、SDGs担当者との連携も

持続可能な地域づくりを意識した取組である以上、区市町村(地方自治体)の観光計画やSDGsへの取組指針がある場合は、それらを踏まえて造成するようにしましょう。

また、地域の素材とSDGsとを紐づけるにあたっては、区市町村のSDGs担当者は心強い相談相手となります。早い段階で取組の趣旨を共有し、参画してもらうとよいでしょう。

地域の学校を巻き込むのも効果的

SDGsスタディツアーの造成や実施にあたっては、地域の学校にも声をかけてみるとよいでしょう。学校の方針や先生の考え方にもよりますが、SDGs学習や探究学習の題材を地域内で探している学校は多いので、授業や課外活動の一環としてSDGsスタディツアーの造成に協力してくれるかもしれません。学校関係者や生徒(学生)に「自分たちの学校が造成に関わった」という思い入れが生まれれば、その後のモニターツアーへの協力や完成後のツアーへの参加も期待できます。



本事業での実践事例より

多摩市 (P.44参照)

- 多摩市内にある私立多摩大学附属聖ヶ丘高等学校は、地域をフィールドにした実践的な探究学習に力を入れている。SDGsスタディツアーの造成にあたり、市役所経由でコンタクトしたところ、高校1年生の有志10数名が探究学習の一環で造成を手伝ってくれることになった。
- 3チームに分かれて、市内の素材の調査やツアー構成の立案などに取り組んでもらった。その成果は地域関係者を集めた場で発表してもらい、その発表内容をもとにSDGsスタディツアーを具体化していった。
- その後のモニターツアーにも積極的に参加してもらえ、ターゲット層と同年代からの貴重なフィードバックが得られた。



専門家や専門事業者の力も借りる

ツアーの造成にあたっては、SDGsや教育旅行の専門家など、地域外の人材に参画してもらうことも効果的です。専門的な視点からのアドバイスや監修、地域外の客観的視点からのフィードバックなどが期待できます。

また、地域の旅行会社や、地域で活躍中のガイドなども、早めに巻き込んで協力体制を築いておくとういでしょう。旅行商品の販売や催行に関するノウハウと実施体制を有する専門事業者が参画してくれると、商品化や継続実施につながりやすくなります。

継続実施を見据えつつ、「とりあえずは、できるところから」やってみる

SDGsスタディツアーの取組自体も持続可能でなければなりません。どんなに充実したツアー内容でも、関係者が疲弊して1回限りで終わってしまったら効果は限定的です。どうしたら無理なく実施し続けられるか？という視点はとても重要です。

一方で、地域関係者の中には、旅行者や子供たちと接すること自体に不慣れで、「上手に説明できるだろうか」「本業に支障が出るのでは」といった不安を抱く方もいます。最初から継続開催を前提にすると腰が引けてしまうような方には、「とりあえずは、できるところから、一度やってみましょう」という巻き込み方でもいいと思います。一度取り組んで成功体験を獲得してもらえれば、自ずと継続の話につながっていくでしょう。

ワンポイント
アドバイス



ツアープランニングの専門家 中谷ゆかりさんにお伺いしました！

\\ 関係者の大まかなベクトルを揃え、あとは柔軟に / /

最初に大きな方向性を決めて、関係者で共有することはとても大事です。方向性が定まっていないと、取組が迷走してしまいます。

ただし、造成の初期段階から綿密な旅程を組んだり、素材を完全に絞り込んで合意形成してしまうと、変更の必要が生じた際に対応しづらくなってしまいます。ツアーの造成は思ったとおりにはいかないものなので、関係者の大まかなベクトルはしっかり揃えつつも、臨機応変に対応できるよう柔軟性を残しておくことが合意形成のポイントだと思います。

以下は、ツアーに関わる関係者の役割分担表の例です。こうした役割分担をイメージしつつ、次ページ以降の**造成編**をご覧ください。

役割	役割の内容	想定される主な関係者
企画立案・とりまとめ ツアー造成	・ツアーの企画立案、関係者の意見を取りまとめる	観光協会や区市町村の観光課
受入事業者 (地域素材提供)	・地域素材にツアー参加者が触れられる場を提供する	一次産業、工場、伝統工芸などの体験提供者、 飲食や施設などの運営事業者
案内役	・ツアー内でガイドやファシリテーターの役割を務める (P.28参照)	観光協会や区市町村の観光課などのスタッフ、 地域ガイド、SDGsや教育旅行の専門家
SDGsとの紐づけ	・地域資源をSDGsの切り口で整理し、どのような学び があるかを考える	SDGs専門家、自治体のSDGs担当、 地域の学校の先生
販売	・完成したツアーを販売(あるいはモデルコースとして情 報提供)する(P.26参照)	観光協会、地域の旅行会社、OTA、 受入事業者
プロモーション	・造成したツアーのプロモーションを行う ・販売者が担当することも多い	観光協会、地域の旅行会社、 区市町村の観光課など
その他パートナー	・授業や課外活動の一環として、ツアー造成に協力 ・モニターツアーに参加しツアーの改善に協力	地域の小中学校、高校、大学などの教育機関 など

4 造成編～SDGsスタディツアーをつくろう

準備編ではSDGsスタディツアーをつくり始める前の準備を3つのSTEPに分けて紹介しました。いよいよツアーの造成です。押さえておきたいポイントやSDGsスタディツアーならではの留意点などを7つのSTEPに分けて説明します。

❁ STEP1. ツアーの基本構成を考える

POINT



- 参加者目線でのテーマと、地域ならではのストーリーを考える
- ターゲットとする学年や旅行形態を具体化する
- ツアーを構成する地域素材と関連するSDGsとを紐づける
- ツアーの商品化に向けて基本的な項目を考える

参加者目線でのテーマと、地域ならではのストーリーを考える

「準備編STEP2」で洗い出した素材候補の中から、いくつかを組み合わせ、あるいは単独の素材でSDGsスタディツアーをつくっていきます。

素材候補を絞り込んでいく過程で、その素材を通して参加者に伝えたい内容もさまざまに思い浮かぶと思います。そうした地域の想いは非常に大切ですが、それだけでツアーをつくると地域側の独りよがりになってしまう危険があります。「参加者がそのSDGsスタディツアーを通して何を学ぶのか?」という参加者視点からもテーマを考えるようにしましょう。

また、素材とテーマ(学び)を組み合わせるだけでなく、学びの内容と地域の歴史や素材の背景などを結び付けてくれる、地域ならではのストーリーを考えましょう。「なぜ自分たちの地域に根付いたのか」「なぜ自分たちの地域では大切にされているのか」といった地域固有のエピソードを添えることで、参加者の地域への理解が深まり、地域のファンや関係人口づくりにもつながります。

ターゲットとする学年や旅行形態を具体化する

ツアーのテーマやストーリーの検討と並行して、ターゲットも具体化していきましょう。ターゲットの設定方法は2つあります。

1 「どんな人にきてもらいたいから考える」

地域として誘客したい学年や旅行形態があらかじめ明確に決まっている場合は、その学年や旅行形態に合いそうな素材やテーマを考えていきます。

同じ学年でも旅行形態(個人/団体、一般/学校)が違えばニーズは異なります。校外学習やサマーキャンプなどの教育現場のニーズは年々変化しています。教育旅行のマーケットニーズを調べる際は旅行会社や地域内の教育機関、教育旅行の専門家などへ相談するとよいでしょう。

2 「どんな素材やテーマを提供できるから考える」

提供できる素材やテーマが限られている場合は、それらがどの学年、どの旅行形態に合うのかを考えていきます。

採用する素材やテーマがどの学年に伝わりやすいかや受入事業者のキャパシティ、曜日などの受入条件を考慮し、校外学習などをはじめとした学校向けなのか、学校外での学習機会を求める一般家庭・子供向けなのか、あるいは両方に対応することも可能なのかなどの仮説を立てます。また学校向けの場合には、クラス単位や学年単位など、どのグループ規模がツアー運営に適当なのか、受入可能人数と学習の観点の両面から検討します。

以下は学年別、ツアーのタイプ別で想定される旅行形態です。

		小学生	中学生	高校生
一般	個人	<ul style="list-style-type: none"> ● 家族(親子)旅(例) ・ 夏休みの自由研究も兼ねた家族旅行 ・ 地域・民間主催の個人向け周遊型イベント(クイズラリー・謎解きイベント) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 家族(親子)旅 ● 友人との旅(例) ・ 夏休みの自由研究も兼ねた家族旅行 ・ 地域・民間主催の個人向け周遊型イベント(クイズラリー・謎解きイベント) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 友人との旅(例) ・ 夏休みの旅行 ・ 地域・民間主催の個人向け周遊型イベント(クイズラリー・謎解きイベント)
	団体	<ul style="list-style-type: none"> ● 塾や青少年育成NPOなどが主催のツアー(例) ・ サマーキャンプなど 	<ul style="list-style-type: none"> ● 塾や青少年育成NPOなどが主催のツアー(例) ・ サマーキャンプなど 	<ul style="list-style-type: none"> ● 塾や青少年育成NPOなどが主催のツアー(例) ・ サマーキャンプなど
学校	団体	<ul style="list-style-type: none"> ● 校外学習(修学旅行含む) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 校外学習(修学旅行含む) ● クラブ活動など学校が有志で募集するツアー 	<ul style="list-style-type: none"> ● 校外学習(修学旅行含む) ● クラブ活動など学校が有志で募集するツアー



本事業での実践事例より

以下は3地域で実施したSDGsスタディツアーの一例です。それぞれのテーマやストーリー、対象としたターゲットや旅行形態、それらを採用した考え方などをご紹介します。

	墨田区(P.40参照)	多摩市(P.44参照)	式根島(P.48参照)
ツアー名	“すみだ”のものづくり体験を通してSDGsが学べるツアー(墨田区ツアーABC共通)	昔の暮らし × SDGs「多摩センターで体験～昔の人のサステナブルな暮らし～」(多摩市ツアーC)	島の自然と暮らしからSDGsを体験するツアー(式根島ツアーA)
テーマ	伝統工芸・ものづくりから持続可能な取組を学ぶ	暮らしの知恵からSDGsのヒントを学ぶ	島の暮らしや生業から課題を見つけ、自ら解決策を考える
ストーリー	墨田区は古くからものづくりのまちとして知られ、今なお多くの職人たちが伝統の技を継承し活躍している。江戸時代から受け継がれてきた匠の技を今に伝える伝統工芸や、墨田区ならではの工業製品には、「SDGsとは何か？」を考えるヒントにあふれている。そんな“すみだ”のものづくりを自らの手で体験しながら、SDGsを楽しく学ぶ。	ニュータウンとして開発されてきた多摩センターだが、昔の暮らしや文化を残すための取組も盛んに行われている。縄文時代や江戸時代の暮らしの中からSDGsのヒントを探す。	温暖化などによる地球環境の悪化はますます深刻になってきている。その影は刻々と私たちに迫ってきており、式根島でもその影響が出始めてきた。少子高齢化も式根島において大変深刻な問題になっている。いつ発生してもおかしくない大地震や、年々威力を増している台風など、自然災害への対策も式根島にとっては大変重要な課題となっている中で、世界と日本が抱える課題を式根島で実感する。
対象学年	中学生	小学校高学年～高校生	中学生～高校生
考え方	スカイツリー見学に訪れる学校の団体旅行の増加を機に教育旅行のニーズを取り込むために造成された既存プログラムをSDGsスタディツアーにリメイク。元々スカイツリーを目的に墨田区へ来るニーズの多かった中学生を対象としている。	火起こし体験や工芸品づくりなど複数の体験を組み合わせ、実際に手を動かして学ぶことができるため、小学生～高校生まで幅広くニーズがあると仮定し、設定した。	体験を通じて、島の課題や工夫を自ら見つけられる年齢であることから中学生～高校生を対象に設定。
旅行形態	団体(教育旅行) グループ規模:クラス・学年単位	団体(教育旅行) グループ規模:最大20人程度	団体(教育旅行) グループ規模:最大20人程度
考え方	既存コンテンツが教育旅行の団体を対象としており、受入可能な事業者と連携。大型団体は、観光協会により会場の別途手配も可能。	各体験の受入は事前予約が必要であることや、暮らしというテーマでSDGsのヒントを探すというストーリーは、個人よりも集団で学ぶ教育旅行に需要があると想定。	式根島の宿や施設のキャパシティから学校の1学年を受け入れるのは困難なため、20名以下でも需要があると考えられる、学校の課外教育(クラブ活動など)をターゲットとして想定。

参考:モニターツアー参加者募集ページ(2023年2月/東京観光財団)
https://www.tcvb.or.jp/jp/news/2023/0213_5059/

ツアーを構成する地域素材と関連するSDGsとを紐づける

SDGsスタディツアーでは、ツアーで取り扱う地域素材が、どのようなSDGsの学びと関連するのかわかりやすく伝える必要があります。SDGsを意識した取組を行う企業や団体に限らず、地域に昔から根付いている農家や伝統工芸、地場産業などが当たり前に行ってきた取組が、結果的にSDGsの達成に寄与している場合もあります。SDGsスタディツアーにおいては、それらをSDGsの切り口から整理し、参加者が理解できるように紐づけ（関連付け）て示すようにしましょう。

以下は、本事業の3地域の事例における、地域素材とSDGsとの紐づけの一例です。



本事業での実践事例より

墨田区(P.42参照)

墨田区
ツアーA

素材:片岡屏風店
からくり屏風づくり

関連するSDGs



学びの内容

伝統工芸を受け継ぐ企業には、ものづくりの過程で多くの持続可能な取組が存在する。長く使い続けられるように修繕・修復できるつくり方をしていたり、素材の有効活用によってごみを削減している点からはSDGs12番「つくる責任 つかう責任」に関連する学びが得られる。また、端材を有効活用した商品をつくることで、廃棄物を削減し、処理にかかる資源やエネルギーの消費を抑えている点でSDGs13番「気候変動に具体的な対策を」に関連する学びが得られる。

多摩市(P.46参照)

多摩市
ツアーB

素材:パルテノン多摩
ミュージアム

関連するSDGs



学びの内容

ニュータウン開発の歴史を展示する施設において、元々あった里山の地域資源を残しながら街を開発した自治体の工夫や住民との合意形成の過程などを知ることができる。これらはSDGs11番「住み続けられるまちづくりを」の具体的な事例を学ぶことにつながる。

式根島(P.49参照)

式根島
ツアーA

素材:電気自動車

関連するSDGs



学びの内容

式根島では電気自動車の普及が進んでいる。電気自動車は走行時にCO₂を排出しないためSDGs7番「エネルギーをみんなに そしてクリーンに」に関する学びが得られる。また、電気自動車に搭載されている蓄電池は停電や災害時の非常用電源にもなり、島内の電力を新島からの送電に頼っている式根島にとって重要な災害対策であるという観点からSDGs13番「気候変動に具体的な対策を」の具体的な事例として学べる。

ワンポイント
アドバイス



ツアープランニングの専門家 中谷ゆかりさんにお伺いしました！

SDGsに紐づけるメリットを素材提供者である事業者理解してもらおう / /

事業者の中には、過去から変わらず行ってきた取組に、比較的新しい概念であるSDGsを紐づけること自体に疑問を感じたり、「それで何が変わるのか」といった冷やかな反応があることも考えられます。

そこで…

- ・ 取組自体を変える必要はない
- ・ 以前から行っている取組がSDGsとマッチする
- ・ 子供たちに馴染みのあるSDGsをフックにすることで、より多くの人に参加してもらえる可能性が広がる

こうしたことを丁寧に伝えてご理解いただくことも、ツアー造成の際の大事なポイントとなります。



コラム④ 地域の取組とSDGsの紐づけ方のポイント

横田 浩一 先生(横田アソシエイツ代表取締役/慶應義塾大学大学院特任教授)

探究学習を実施している教育現場では、「レールの敷かれたものに対してはそれを真面目に実行できるけれど、探究学習のように答えのない問いに対してどうやって進めていったらよいか分からない生徒が多い」「地域やクラス内での同調圧力が強くはみ出すことを嫌う面もあり、どのように活動してよいかイメージを持ちづらい」といった声が先生方から聞かれます。このように探究学習は、まだまだ現場では試行錯誤が続いている状況です。

生徒にとって、「困っている人」を見たり、「困りごと」に直面したりする体験をすると、「どうにかしたい」という感情が芽生えます。また、何もできない生徒は罪悪感を持ったりします。この「心のゆらぎ」をどうやってつくるかが、内発的動機付けを生み出す最大のポイントになります。海洋プラスチックゴミやLGBTQ+などのダイバーシティについて多くの生徒が関心を持つのも、彼らの身近にある大きな課題だからでしょう。

地域には社会課題が多くあります。それをどうやって生徒に対して伝えていくかがポイントです。従来の観光では、地域の良いところをコンテンツとして届けてきました。しかし地域の課題や困りごとを説明することの方が、生徒にとって内発的動機付けを生む大きなきっかけとなります。この商店街を残したいが空き店舗が目立つ、このきれいな海岸を残したいが漂流ゴミが大量だ、この伝統を残したいが後継者不足だ、といったことで大丈夫です。地域の課題を正しく理解してもらうこと、それが探究学習には重要です。

今の生徒たちはSDGsネイティブ世代といわれる、SDGsや社会課題に詳しい世代でもあります。SDGsにその課題解決が紐づけられるのかを示してあげることで、より理解は進みます。スタディツアーのテーマに設定した課題に対して17のゴールのうち関連するものを提示しましょう。

例えば、

この商店街を残したいが
空き店舗が目立つ



このきれいな海岸を残したいが
漂流ゴミが大量だ



この伝統を残したいが
後継者不足だ



といったイメージです。複数の項目が関係することも多いでしょう。

SDGsは国連の合意ですので、投資責任原則(PRI:金融分野のイニシアティブ)や毎年開催されるCOP(国連気候変動枠組条約締結国会議)など、国連の他のイニシアティブとも互いに大きく影響し合っています。気候変動、生物多様性、人権、人的資本などの分野で新たなルールが生まれることにより、社会で注目されるテーマが変化していきます。この最新事情とSDGsの理解については専門家に相談するとよいでしょう。



ツアーの商品化に向けて基本的な項目を考える

ツアーの骨組み(素材、テーマ、ストーリー)とターゲットが決まったら、商品化に向けて検討します。ツアーの商品化の際に検討すべき基本的な項目は以下のとおりです。

周遊順(複数の素材を組み合わせる場合)	<ul style="list-style-type: none"> • どのような周遊順が時間面で効率的か？ • どのような周遊順がテーマやストーリーを伝えるのに効果的か？
演出	<ul style="list-style-type: none"> • ターゲットの興味・関心を引き付けるにはどんな演出がよいか？ (例)見学だけではなく体験を入れる、クイズや謎解きなどの要素を入れる、地域の人との対話の機会を設定する など
開始時間と所要時間	<ul style="list-style-type: none"> • 午前、午後どちらのスタートが受入事業者にとって都合がよいか？(受入事業者が副業としてツアーに取り組む場合は、本業に支障がないように設定) • 各コンテンツ及びツアー全体の所要時間はどれくらいが適切か？(参加者の学年に応じた集中力の持続時間を考慮して設定)
価格	<ul style="list-style-type: none"> • ターゲットが参加しやすく、かつ持続的に運営可能な価格はいくらか？ • 価格を公開せず、モデルコースとしてウェブサイトなどに掲載し、問合せに応じてオーダーメイドで対応する方法もある(P.26参照)。



STEP2. ツアーの「届け方」を考える

POINT



- 地域特性や運営体制を踏まえ、現実的な「届け方」を検討する
- ツアーの商品化には1)直接販売、2)OTA経由で販売、3)TTA(旅行会社)経由で販売の3つの方法がある。販売せずモデルコースとして紹介する方法も

せっかくSDGsスタディツアーをつくったのに参加者が集まらないということが起きぬよう、造成の早い段階で、参加者へのツアーの「届け方」(販売や提供の方法)を検討しておくことが大切です。STEP2では「届け方」の種類やその特徴について説明していきます。

地域特性や運営体制を踏まえ、現実的な「届け方」を検討する

SDGsスタディツアーの「届け方」として一般的には、オンライン旅行会社(OTA)などを通じて一般家庭・子供に販売する、旅行会社(TTA)に修学旅行のコンテンツとして営業する、といった方法が考えられます。

一方で、SDGsスタディツアーという新しい切り口のツアーについて、いきなり販売を行うのはハードルが高いと感じる地域も少なくないのではないのでしょうか。まずは立ち上げのコストや規模を抑えたスモールスタートで、市場の反応を見たいという考えもあると思います。

その場合、区市町村や観光協会のウェブサイトに「モデルコース」として掲載し、SDGsスタディツアーの認知度を高めたり、学校や旅行会社からの問合せにオーダーメイドで対応したりするところから始めてもよいでしょう。

このように、「届け方」にはいろいろな方法があります。以下にまとめましたので、それぞれの特徴を知って、地域特性や運営体制の制約などを踏まえ、どの形態が持続可能かという観点で検討してみてください。

ツアーを販売する方法は3つ。販売せずモデルコースとして紹介する方法も

SDGsスタディツアーの届け方は、販売をする場合と販売をしない場合の2パターンに分かれます。

販売をする場合は、1)直接販売、2)OTA経由で販売、3)TTA経由で販売という3つの方法があります。販売をしない場合は、先述したとおり、区市町村や観光協会のウェブサイトに「モデルコース」として掲載する方法があります。

それぞれの届け方に必要な条件や想定されるターゲットなどは以下のとおりです。

■販売する場合

届け方	概要・特徴	想定ターゲット
直接販売	<ul style="list-style-type: none"> ● SDGsスタディツアーを造成した観光協会等が、自前でツアーを販売する^(注) ● 自前でのPRや営業を工夫する必要がある ● 問合せや料金請求などの対応を自前でを行う必要がある 	<ul style="list-style-type: none"> ● 一般家庭、子供 ● 近隣の学校の校外学習など
OTA経由で販売	<ul style="list-style-type: none"> ● SDGsスタディツアーを造成した観光協会等が、OTA(Online Travel Agent)に販売委託し、タビナカコンテンツとしてOTAのウェブサイト上で販売する^(注) ● OTAのウェブサイトの集客力を活用できる ● 販売手数料を支払う必要があるが、問合せや料金請求などの対応を効率化できる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 一般家庭、子供など
TTA経由で販売	<ul style="list-style-type: none"> ● TTA(Traditional Travel Agent、OTAでない旅行会社のこと)経由で学校などへ営業してもらい、教育旅行の工程に組み込んでもらう ● 旅程管理がTTAの業務範囲となるため、旅行業登録がなくても販売できる ● TTAの営業力を活用できる ● TTAへ販売(送客)手数料を支払う場合があるが、問合せや料金請求などの対応を効率化できる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 学校の教育旅行など

^(注) 交通や宿泊の手配を伴う旅行商品を販売する場合は旅行業登録が必要。最も登録のハードルが低いのは地域限定旅行業(2013年に新設された旅行業の区分)。営業所がある市町村と、隣接市町村を対象とした着地型旅行商品の造成販売ができる。その他の旅行業については以下を参照。

参考:旅行業法(観光庁)

<https://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/sangyou/ryokogyoho.html>

■販売しない場合

届け方	概要・特徴
モデルコースとして掲載	<ul style="list-style-type: none"> モデルコースとして区市町村や観光協会などのウェブサイトに紹介 所要時間や周遊順序などを具体的に明示することで、旅行者が自分のペースで巡ったり、旅行会社が自ら企画する教育旅行の行程として検討することが可能になる 興味を持った学校や旅行会社からの問合せにオーダーメイドで対応する中で、ツアー商品販売に発展していくことも考えられる 教材^(注)は、モデルコースと一緒にウェブサイト上で公開しておくか、問合せに応じて都度提供(有償/無償)する 予約が必要な施設は表記に注意(営業日・営業時間・予約要否などを明記することでトラブルを回避)

(注) 教材についての詳細はP.30参照



本事業での実践事例より (現在検討中の事項や今後の展望を含む)

多摩市 (P.44参照)

多摩市では、モニターツアーで検証した後、モデルコースとしてSDGsスタディツアーを公開することにした。ツアーの内容は、コース紹介や学習ポイントなどをまとめ、多摩市のウェブサイトで紹介することを検討している。

モデルコースを見た個人旅行客が、モデルコースに沿って自分で巡ったり、学校が取引先の旅行会社に「この内容を体験したい」と依頼したり、旅行会社が商品化するなどが期待される。

多摩市のモデルコース例(サンプル)

多摩センターで体験～昔の人のサステナブルな暮らし～

今の暮らしを見つめ直してみよう

KEY WORD #暮らし #共生 #エコ
#産業 #文化 #伝統





コース紹介

テキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキスト
テキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキスト
テキストテキストテキストテキストテキストテキストテキスト

学習テーマ

テキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキスト
テキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキスト
テキストテキストテキストテキストテキストテキストテキスト

モデルコース

- 1

東京都立埋蔵文化財調査センター

テキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキスト
テキストテキストテキストテキストテキストテキスト
- 2

昼食

テキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキスト
テキストテキストテキストテキストテキストテキスト
- 3

旧富澤家

テキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキスト
テキストテキストテキストテキストテキストテキスト

問い合わせ先
 多摩センター地区連絡協議会 担当:〇〇
 TEL 00-0000-0000
 メール aaaaaa@aaaaa.co.jp

STEP3. ツアーの「案内役」を考える

POINT



- 案内役には「ガイド」と「ファシリテーター」の2つの役割が求められる
- 最後の「振り返り」では、参加者の気付きや考えを引き出す
- ファシリテーターは1)地域側が務める、2)学校側が務める、3)専門家に外注するの3パターン
- 案内役の確保が難しい場合は「セルフ観光型」という選択肢も

「案内役(ガイド、ファシリテーター)」は、SDGsスタディツアーの要です。STEP3では案内役の役割やポイント、誰が務めるか、不在時の代替策などについて説明していきます。

案内役には「ガイド」と「ファシリテーター」の2つの役割が求められる

SDGsスタディツアーにおける「案内役」には、主に以下のような役割が求められます。

ガイドとしての役割

- ・ ツアー中の地域素材をSDGsの切り口から紹介する。
- ・ 地域ならではのストーリーを織り交ぜながら伝える。

ファシリテーターとしての役割

- ・ ツアーのテーマを説明する。
- ・ 参加者が地域の課題などを自分事化できるよう参加者に問いかける。
- ・ 参加者の発言を引き出し、アウトプットさせることで理解を深める。

一般的なツアーガイドは、観光情報や知識を一方向的に参加者へ与えることが多いと思います。SDGsスタディツアーの案内役も、子供たちがSDGsとの関連性に気付くよう適切に説明する必要がありますが、あまりすべてを説明しすぎず、子供たちが地域課題を自分事として捉え、探究的な学び(P.5参照)を導くような手法でファシリテーションすることが理想です。難しく感じるかもしれませんが、「説明しすぎない」「子供たちの学びや気付きを大切にすること」といったポイントを押さえれば、地域で案内役を育成することも可能です。

一人がガイドとファシリテーターを兼ねてもよいし、二人以上で役割分担してもよいでしょう。ファシリテーターは引率する学校の先生や外部の専門家などに担ってもらうことも可能です(P.29参照)。

最後の「振り返り」では、参加者の気付きや考えを引き出す

SDGsスタディツアーでは、参加者がツアーを通じた学びをアウトプットするため、ツアーの最後に「振り返り」を行うことが重要です。そこでは案内役がファシリテートして、参加者がツアーを通して感じたことや学んだこと(例:どのような点がSDGsと関連していると思ったか、それはなぜ重要なのかなど)を、参加者自身に発表してもらいます。振り返りでの参加者の発言に不正解はありません。お互い感じたことを共有し、多様な意見を自分に取り入れて再び考えることで、学びをより深めることができます。

ワンポイント
アドバイス



ツアープランニングの専門家 中谷ゆかりさんにお伺いしました！

\\ ツアーを通じた学びのアウトプット方法 / /

振り返りはその場でメモやワークシートに書いてもらう方法もありますが、それに加えて一人ずつ発言する時間をとれたら理想的です。やはり、言葉にして他の参加者と共有することで、(教室ではなく)リアルなスタディツアーだからこそ得られる深い学びにつながります。地域をよく知る方々が一緒にいてくださるとなおさらです。

参加者への質問内容のおすすめを2つ紹介します。1つはツアー(体験でもよい)の中で新たに気付いた、SDGsのゴールとの結びつきや、その取組を知った感想。2つ目が、その気付きをもとに、明日から自分の行動をこう変えると宣言する「マイ・アクション」です。マイ・アクションは、学んだことを「自分事」にすることができるという点で、スタディツアーの振り返りにおすすめです。

セルフ観光型のSDGsスタディツアーとは、地域素材を組み合わせた周遊コースを、教材に取り組みながら参加者が自分のペースで巡る形式のツアーのことです。開催運営の手間が大幅に軽くなりますが、案内役の役割を教材で補うため、教材づくりに工夫が必要です(詳細はP.31参照)。

なお、セルフ形式でも参加者がトラブルなく周遊できるよう、立ち寄り施設の営業情報(営業日・営業時間・予約要否など)は正確に提供する必要があります。なるべく予約不要な施設で構成するとトラブルも少なく、誰でも参加しやすいツアーとなります。



本事業での実践事例より

式根島ツアーB「親子で島旅を楽しみながらSDGsを学ぶセルフ型ツアー」(P.50参照)

式根島では個人旅行の需要が高く、かつ案内役となる人材が不足していることから、学校団体向けツアーとは別に、親子向けセルフ観光型ツアーの造成にも取り組んだ。具体的には、親子でSDGsを楽しく学べる「4つのミッション」を記載した教材冊子を作成し、それを手に自由に島を巡るスタイルのツアーを造成した。

今後は、教材冊子を式根島観光協会のウェブサイトで公開したり、島の入口となる港で配布するなどして、親子での新たな島の楽しみ方を提案することを検討している。

STEP4. ツアーに必要な「教材」を考える

POINT



- 教材でどこまで説明するかは、ツアーの構成や進行方法次第
- 学校向けツアーに必要な教材は、最大で4種類(事前/現地/事後学習用、先生用)
- 一般家庭・子供向けツアーは「楽しめる」要素も大事
- 案内役がないセルフ観光型の教材にはひと工夫を

SDGsスタディツアーで案内役と並んでもう一つ重要なのが「教材」(配布資料)です。案内役の説明を補足したり、ツアーでの学びをより深めたりする役割を果たします。STEP4ではSDGsスタディツアーで求められる「教材」の種類やポイントを説明していきます。

教材でどこまで説明するかは、ツアーの構成や進行方法次第

SDGsスタディツアーでは、参加者に地域の魅力や課題をSDGsの切り口から深く理解してもらうことを目指しており、教材は理解をサポートするために欠かせない存在です。

しかし、ツアーで扱う地域素材と、それと関連するSDGsのゴールについて、どこまで詳しく教材上で解説するかは、ツアーの構成や進行によって主に以下の2パターンが考えられます。

ツアー構成・説明方法

参加者にSDGsとの関連性を「伝える」ツアー構成

- ・地域側が考えた関連するSDGsを参加者に伝え、理解してもらう構成。
- ・案内役は、SDGsとの関連性をツアーの中で随時解説していく。



教材上に、関連するSDGsとその解説を明記しておく。
P.33墨田区教材事例参照

参加者にSDGsとの関連性を「考えさせる」ツアー構成

- ・参加者自身に、関連するSDGsとその理由を考えさせる構成(探究的な学びをより重視する構成)。
- ・案内役は、SDGsとの関連性を、ツアーの中では触れず、振り返りで参加者の発言を引き出しながら解説する。



教材には、関連するSDGsを直接明記せず、参加者が考えを書きこめるワークシート形式にする。
P.32式根島、P.47多摩市教材事例参照

学校向けツアーに必要な教材は、最大で4種類(事前/現地/事後学習用、先生用)

現在、教育現場では探究学習が行われています。探究学習とは、自ら問いを立てて、それに対して自ら答えを出していく学習方法で、授業においても子供たちの主体性を引き出すことが重要なテーマとなっています。この探究学習の中心にある授業が「総合的な学習(探究)の時間」です。

SDGsを学ぶ学習は、この探究学習の一環として行われることが多いため、校外学習などの学校向けツアーに必要な教材は、主に以下の4種類に分かれます。ツアー当日に使用する「現地学習教材」だけでなく、「総合的な学習の時間」などの授業で使用する「事前・事後の学習教材」も必要になる場合があります。事前・事後学習教材は学校で作成する場合がありますが、受け入れる地域側で用意してあると、学校側でも学習のイメージをつかみやすくなるため、旅行先として選ばれる可能性が高まります。

また、引率する先生にファシリテーターとしての役割を担ってもらう場合(詳細はP.29参照)には、「先生用補足資料」を地域側で用意すると円滑なファシリテートが期待できます。

	概要	ポイント
事前学習教材	<ul style="list-style-type: none"> ・ツアー前に配布する「予習」用教材 ・ツアーでの立ち寄り先の情報、学びのポイントを提示 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に読んでおくことで、ツアーでの理解を深められる効果がある ・自ら調べることが探究学習であるため、最低限の情報提示や、下調べを誘導するワークシート形式でもよい ・学校側で用意する場合もあるが、地域側で用意があると好印象
現地学習教材	<ul style="list-style-type: none"> ・ツアー参加時に使用する教材 ・訪れるスポットや体験について解説する「テキスト」と、気付いたことを書き込む「ワークシート」の2種類で構成する 	<ul style="list-style-type: none"> ・案内役が教材を活用しながら説明するので、説明は書きすぎなくてよい ・ツアー中の案内内容・順番とリンクさせる必要がある
事後学習教材	<ul style="list-style-type: none"> ・ツアー後に書きこめる「復習」用教材 ・ワークシート形式で生徒が自らの考えを書きこめるようにする 	<ul style="list-style-type: none"> ・探究学習を目的とした教育旅行で必要とされることが多い ・学校側で用意する場合もあるが、地域側で用意があると好印象
先生用補足資料	<ul style="list-style-type: none"> ・修学旅行などで引率する先生に配布する資料 ・最後の振り返りで、引率の先生がファシリテーターとしての役割を担えるようにするための先生向け解説書 	<ul style="list-style-type: none"> ・ファシリテーターの役割を先生に担ってもらう場合に用意する ・ツアーのテーマや狙い、地域ならではのストーリー、SDGsの学びポイントなどを先生に理解しておいてもらうことで、子供たちの学びや気付きをアシストしてもらえる

一般家庭・子供向けツアーは「楽しめる」要素も大事

一般家庭・子供を対象とするSDGsスタディツアーの場合、基本的には現地学習教材の1種類を用意すればツアーとして成立します。観光を兼ねて訪れることが想定されることから、SDGsの学び要素をしっかりと押さえつつも、「楽しむ」要素を多く盛り込むことがポイントです。



案内役がないセルフ観光型の教材にはひと工夫を

案内役のないセルフ観光型のSDGsスタディツアーの場合、なおさら教材に「楽しめる」要素をふんだんに盛り込む必要があります。例えばクイズラリーや謎解きなどのアトラクション要素を盛り込み、ツアーへの没入感を高める工夫を取り入れることも検討してみてください。

さらに、セルフ観光型は案内役がないため、それぞれの立ち寄り先で何をどう学ぶかを教材に明確に記載する必要があります。学習の要素を強めるには、事前学習用にツアーに関連した地域の紹介資料や、事後学習用に振り返りのワークシートなどを用意すると、家庭学習や自由研究などに役立ててもらいやすいでしょう。

以下は本事業の3地域で作成した教材の一例です。

学校向けツアーの教材例

◇事前学習教材

式根島ツアーA「島の自然と暮らしからSDGsを体感するツアー」

*参加者に事前配布

内容 式根島の基礎知識や地域課題などについてまとめている。例えば「漁業の不振」という課題と解決に向けた取組の一つである養殖産業についての解説を記載。文中には、関連するSDGsについての解説は記載せず、参加者側にツアー中の養殖体験や漁師の話を通じて、実際の取組を体験・体感し、それらがどのSDGsのゴールに関連しているかを考えさせる構成にしている。

式根島の課題

年々漁獲高が減少。漁業の持続が危ぶまれている

～ かつて東京の魚と呼ばれた「タカバ」も激減、漁獲できる魚の変化は温暖化の影響といわれている ～

式根島の漁師さんに関してみると、昔たくさん獲れていた魚が急激に減っているそうです。「たかば」や「イセエビ」、「てんぷさ」などが全然獲れなくなってきたと、下表の漁獲量の推移と照らし合わせてみるとそのお話を聞かれていますね。

主な魚種	2015年	2017年	2019年	2020年
てんぷさ	3,822	3,652	2,760	80
たかば	10,928	406		170

式根島の漁師さんのお話

昔獲れていた魚が全然とれなくなて、それが年々減ってきているんだ。

昔、東京の魚といわれてた「たかば」も全然とれなくなて、イセエビもほとんどとれなくなてしまった。

磯やけとは

海藻が生い茂る「藻場」は、海の多様な生き物を育むやりかたのような場所です。

ところが最近、地球温暖化などが原因で増えすぎたウニが海藻を食べ荒らしてしまう「磯焼け」が世界各地でおきているんだ。この式根島でも海藻がなくなり磯焼けの減少が発生しているんだ。海がどんどん変わっているんだね。

式根島の取り組み

式根鯛平君が式根島の未来切り開く

～ 漁業の不振が続く中、鯛の養殖という新たなビジネスを開始しました ～

式根小学校の生徒みんなで決めた名前が式根鯛平君。

次代を担う子供たちの夢を乗せて式根鯛平君は全国の食卓に送られる。脱炭素社会を目指す式根島にとって養殖事業は大きな切り札となっている。そんな思いが込められた、人気のあるお魚が間もなく登場する。

約5年の歳月をかけた毎日エサやりしながら育て、鯛を出荷する際は、「感謝状」を添えて丸山さんへ送ります。

島の未来を育んで

漁師が獲れる魚が少な過ぎるから、今は養殖で間に合せて漁に出られないことが多いらしい。

島の未来を思い、養殖の「鯛」から「育」で「鯛」の「鯛」を育てて、式根島で養殖が盛んになりました。主力の養殖は「式根鯛」の「鯛」を育てて、島内外に式根島の鯛の魅力を伝える取り組みが盛んに行われています。

島の魅力を伝えるだけでなく、自然災害で本土との物流が途絶した際の備えとしても期待されています。

美味しさの訳

太平洋に新鮮な海水が入る広い川です。魚の体に余分なストレスのない環境で育ちます。鯛の成長スピードは通常の2倍ほど早く、配合飼料を使わず、生餌のみで育てばよくなるので、健康な鯛が育ちます。

さらに、内臓にエサが残りやすいので出荷前にはエサを食べて、内臓を綺麗にして、出荷の際に水揚げ後、すぐに血抜き・神経締め・水洗いをし、新鮮な状態で提供しています。

◇現地学習教材

式根島ツアーA「島の自然と暮らしからSDGsを体感するツアー」

*参加者にツアー初日に配布

内容 地域の情報や解説は「事前学習教材」に集約し、この「現地学習教材」では、SDGsについてのツアー中の学びや気づきなどが書き込みできる、余白中心のワークシートとした。書き込んだワークシートはツアー後の「振り返り」においてグループで共有する際に使用した。

Misson 式根島を徹底分析しよう!

今日から2日間かけて、チームで式根島を探検します。その中で見つけたSDGsに関連することや、式根島の魅力について感じたことを、このスタディブックにたたくメモをしよう。

POINT

- じぶんの街と比べての違いや、島ならではのことに注目
- SDGsの基本3要素である「社会」「経済」「環境」の観点から考えてみよう
- とにかく、感じたことをメモにしよう!

SPOT1 神引展望台にて

お話の内容 - メモ -

私が見つけたSDGsや魅力など

◇先生用補足資料

多摩市ツアーC「多摩センターで体験～昔の人のサステナブルな暮らし～」

*先生に事前配布

内容 訪問先の一つである東京都立蔵文化財調査センターの見学ポイント説明。先生がファシリテーターとしての役割を担えるよう、見学の流れやSDGsとの関連性などを解説している。

東京都立蔵文化財調査センター

見学のポイント

本館では、展示を観察して、昔の人の暮らしからSDGsのヒントを探します。学習者の案内のもと、当時の人がどのような生活を送っていたのかを解説いただき、その後に自由に展示を見学してください。

その際「衣服」「食」「住」の観点で、SDGsにつながるポイントを探してもらいます。解説コーナーで質問をすることで、より多くのSDGsのヒントを見つけることができます。最後は体験をさせてください。

SDGsにつながることを、自由に想像する活動が大事なので、決まった答えがないワークとなります。

体験を体験し、見つけたSDGsのヒントを発表することで、他者の視点も共有でき、新しい視点を感じることができると、ぜひ共有の時間を作ってください。

多摩ニュータウンの遺跡

日本最大級の鉄骨高層ビル、多摩ニュータウン。この建設から約50年前の建設現場から江戸時代までの約1000年の遺跡が見つかりました。遺跡からは当時の人の暮らしを知る事ができます。

多摩ニュータウンに建った人々の「住」の歴史は、2000年前に遡ります。遺跡からは当時の暮らしの様子が分かります。当時の暮らしを知ることで、当時の暮らしがどのようなものであったのかを想像することができます。また、当時の暮らしがどのようなものであったのかを想像することができます。

縄文の村

東京都立蔵文化財センターに隣接する縄文遺跡「縄文の村」。多摩ニュータウンの57遺跡（縄文時代）を再現した展示です。当時の暮らしの様子が分かります。縄文の村には、5000年前に縄文時代の生活の様子を再現した展示があります。縄文の村には、自然の恵みを生かした生活の様子を知ることができます。縄文の村には、自然の恵みを生かした生活の様子を知ることができます。

SDGsのタネ（一例）

- 衣服**
 - 織や染の技術の発展を経て「織」の文化が広がった。植物から採れた糸は環境に優しく、長く使える。
 - 電気を使わない道具で織りや染、糸を使ったアクセサリーを作っていた。
 - おしりをして、タンスなどで糸を巻いていた縄文時代の女性も多かった。
- 食**
 - 縄文時代には土器が発明されたことにより、煮炊きができるようになり、加工して保存できる食料が増えた。
- 住**
 - 穴を掘り、そこに水や植物などの自然にある材料を使って住居を建てて暮らすことで、冬は冷たく夏は涼しい。
 - いっぺんに家を壊す必要がなかった。水漏れなどがあっても、人が住み続けられていた。水漏れなどがあっても、人が住み続けられていた。
- 生活**
 - 火の力（薪）の力を水の中で使った、せっけんになる。水も汚さず自然に還る。
 - 石や電気を使わずに火をおこす道具が発明された。
 - 多摩ニュータウン遺跡から見つかった土器は、縄文時代の暮らしの文化が伝えている。

この一冊にもSDGsのタネはたくさんあります。そのタネを大切に育て、みんなの未来を豊かにしよう。

◇現地学習教材

墨田区ツアーA 「からくり屏風づくり体験」

*参加者にツアー当日に配布

内容 事前・事後学習教材と現地学習教材を一体化させ、テキストとワークシートの機能を1枚にコンパクトにまとめた例。伝統工芸の屏風についての概要説明に加え、「端材の有効活用」と「伝統の手しごとを守る」という要素とSDGsとの関連性の解説を記載し、職人からの口頭説明を補完する構成とした。



一般家庭・子供向けツアーの教材例

◇現地学習教材

式根島ツアーB 「親子で島旅を楽しみながらSDGsを学ぶセルフ観光型ツアー(注)」

*参加者に事前配布

(注)セルフ観光型ツアーの詳細はP.29参照

内容 親子旅をターゲットとし、冒険仕立ての「ミッション冊子」として制作した。島の課題を題材にしたミッションに親子で取り組む中で、SDGsを楽しく学べるような構成になっている。



STEP5. モニターツアーで検証する

POINT



- モニターツアーは「教育関係者」→「小中高生」の順に2回行うのがおすすめ
- 参加者目線と運営者目線の両面でツアー内容を検証する
- 記録を残すことも忘れずに。被写体へ広報利用の事前承諾も
- ツアーの最後に参加者と関係者で意見交換会を行い、改善点を確認する

モニターツアーは「教育関係者」→「小中高生」の順に2回行うのがおすすめ

STEP1～4でSDGsスタディツアーの原型ができれば、次にモニターツアーを実施しましょう。実施の目的は、一般的なツアーと同じく参加者の満足度や運営上の課題の点検を行うほか、「SDGsの学び」は参加者にどのように受け止められたか、参加者全員の集中力が持続する中身となっていたか、所要時間や運営は適切だったか、使用した教材内容の充実度や漢字やルビなどの見やすさの点は十分だったか、などを検証することです。

モニターツアーは、想定ターゲットである小中高生向けだけでなく、教育関係者向けにも行うことをおすすめします。教育関係者とは、学校の先生や旅行会社の教育旅行担当者などです。先生方はもちろんですが、旅行会社の教育旅行専門の担当者も、学校の最新カリキュラムや子供たちへの効果的な伝え方、教育旅行商品として求められるニーズや条件などを熟知しています。こうした教育関係者に参加してもらうことで、専門的かつ客観的な視点から改善意見が期待できます。

モニターツアーの順番は、まず「教育関係者」を対象に実施し、そこで出た意見を踏まえて改善した後、次に「小中高生」を対象に実施するとよいでしょう。その結果を受けてさらに改善を重ねることで、ツアーの完成度が高まります。受入事業者との情報共有や内容修正の相談・協議の工程を考慮し、2回目のモニターツアーは少なくとも1ヶ月程度あけて実施することをおすすめします。

参加者目線と運営者それぞれの目線からツアー内容を検証する

モニターツアーでは、参加者側と運営者側の、2つの目線からツアー内容を検証します。主なチェックポイントは以下のとおりです。

①参加者側のチェックポイント

参加者向けにアンケートを行い、ツアーの満足度のほか、事前に配布する教材や当日活用するワークシート、案内役の説明などが「SDGsの学び」につながっているかを確認しましょう。

主なチェックポイント(一例)

- ツアーの満足度
- 配布教材は分かりやすかったか
- 案内役の説明や教材を通じて、地域の取組とSDGsの関連性が理解できたか
- ツアーを通じて、どのような気付きや発見があったか
- 今後も同様のツアーが開催されるとしたら参加したいか

教育関係者には以下についても、意見を聞くとよいでしょう。

- ツアーの内容はどの学年(小学生～高校生)向けか
- 受入環境は教育旅行向けか
- 販売価格はいくらが妥当か

②運営者側のチェックポイント

運営者側の目線からも、ツアー当日の案内や動き方に問題がないか検証しましょう。特に小中高生を対象にしたツアーでは、説明が長すぎて子供たちの集中力が続かなかったり、想定以上に移動時間がかかるといったことも懸念されます。アンケートでは確認できない参加者の反応をツアー運営中にも目視で確認しておくことも必要です。

主なチェックポイント(一例)

- 案内をするにあたって、現在の受入体制で設定した催行人数は妥当か
- 立ち寄り先の周遊順(行程)は妥当か
- 見学や体験、振り返りの時間配分は妥当か
- 教材や台本の内容に沿ってストーリーやSDGsの学びのポイントを伝えられているか
- 運営側が伝えたい学びのポイントと参加者の気付きにズレがないか

記録(写真や映像)を残すことも忘れずに。被写体へ広報利用の事前承諾も

写真や映像などモニターツアーの記録は必ず残しましょう。商品化を目的とした改善に加え、ツアー募集時やモデルコース掲載など観光協会ウェブサイトの重要なPR素材になります。また、旅行会社や学校から問合せがあった際、ツアーをイメージしてもらうための営業資料としても写真は欠かせません。

ただし、被写体になる参加者の事前承諾が必要です。モニターツアーの募集時の条件に明記しつつ、ツアー開始時にも口頭や書面で承諾をもらうなど、広報使用への許可を得ることを忘れないようにしましょう。



コラム⑤ ツアー催行は安全第一、緊急時対応への備え

ツアーの安全性の確保は必須です。ツアー造成と並行して緊急時対応を万全に考えておくことが不可欠で、モニターツアーで安全を確認した後に、本格的に商品化をしていく運びとなります。特に、学校が主体となった校外学習などでは、宿泊を伴う・伴わないに限らず、安全性が確保されているかが選ばれるための重要条件となります。

まず、事故が起きないように予防措置を講じます。そして、事故だけでなくケガや急病なども含めた緊急時の対応の要は、連絡体制の確立です。運営側関係者や病院、警察など夜間や休日でも通じる連絡先の把握は言うまでもありませんが、(旅行会社を通さず直接販売する場合には)小中高生参加者の保護者連絡先も事前に入手しておく必要があります。

以下は式根島で行われたモニターツアーのチェックポイントの一例です。

- 参加者及び保護者の連絡先リスト
- アレルギー食材の事前確認
- 病院の緊急連絡先(24時間対応)の把握
- 地震の際の初動と避難先の確認
- 事故防止のルール設定:消灯時間の設定/一人での外出禁止や自由行動時のルール
- ヘルメットの準備(自転車乗車時)
- ライフガードの準備(養殖場)
- 事務局車の伴走(救急キットの準備)

ツアーの最後に参加者と関係者で意見交換会を行い、改善点を確認する

モニターツアーの最後にぜひ行いたいのが、参加者と地域関係者が一堂に会した意見交換会です。ツアーを終えた直後に、参加者から率直な感想や意見を直接聞くことは改善に向けて非常に役立ちます。

地域関係者にとっては、参加者の声を生で聞くことで「自分たちの地域にはこのような魅力やニーズがある」という新たな気付きや再確認にもつながります。そこから、「こんな取組も、SDGsの学びにつながるのでは」といった新たなアイデアが生まれたり、「今後も継続してSDGsスタディツアーに取り組んでいこう」という意欲によって、ツアーがブラッシュアップされながら持続的に提供できるといった可能性も期待できます。



本事業での実践事例より

式根島ツアーA 教育関係者向けモニターツアー (P.49参照)

- 教員7名が参加して、2泊3日の行程で行われた。
- 最終日に、地域関係者と参加者(教員)が一堂に会して約2時間の意見交換会を実施した。
- 教員からは「生徒たちは話を聞くだけでは頭に入らない。せっかく島に来るのであれば、島ならではの暮らしを五感で感じられる体験があるといい。少人数のグループに分け、職場体験ができるといいのでは」という提案がなされた。
- それを聞いた地域関係者が各々に自分の生業や活動を語っていくうちに、「うちではこういう体験を提供できる」「定例のビーチクリーンと同時開催すれば島民との交流の機会にもなる」といった前向きな議論に発展した。
- こうした意見交換会の結果、以下4つの体験コンテンツの造成につながった。
 - 1) 式根島特産「あめりか芋」の畑で、昔から伝わる伝統的な農作業を体験
 - 2) 島の経済活性化に寄与する真鯛養殖の現場で餌やりや見学体験
 - 3) 災害時にも役立つ電気自動車から、島のエネルギー&防災問題を学ぶ
 - 4) 島民とともに砂浜のごみを拾うビーチクリーン活動に参加

STEP6. 商品としての仕上げ

POINT



- モニターツアーで洗い出した改善点を反映する
- 販売体制の整備と、継続的なPRの仕組みを考える
- ツアー催行日や発売時期、申込期限などを決定し、タリフの記載内容を確定

モニターツアーで洗い出した改善点を反映する

参加者から出た意見や、運営者側の気付きや認識した問題点などを踏まえ、ツアーの構成や教材、案内方法などを改善します。ツアー素材そのものやテーマの難易度が想定ターゲットに合わなさそうな場合は、ターゲット(学年など)を見直すことも検討します。

販売体制の整備と、継続的なPRの仕組みを考える

商品化にあたっては、販売体制を整備する必要があります。また、継続的に商品をPRするための仕組みを考えることも大切です。

いずれも地域によって人員や組織などの状況が異なるため、モニターツアーから得た知見を活かしながら、無理なく持続可能な販売体制や運営する仕組みを考える必要があります。以下の本事業に参加した3地域の事例も参考にしてください。



本事業での実践事例より (現在検討中の事項や今後の展望を含む)

墨田区(P.40参照)

販売体制の整備

- すでに教育旅行の販売体制が整っているため、その体制をそのまま利用する(墨田区観光協会が窓口となり、旅行会社へのプロモーションや申込を受けた際の受入事業者との調整などのコーディネーター役を務める)。

継続的なPRの仕組み

- 既存の体験コンテンツも、リメイクしたSDGsスタディツアーも、両方を販売していく(学校側の多様なニーズに対応できるようにするため、既存の体験コンテンツに「SDGsの学び」をオプションとして付加できるようにするイメージ)。

多摩市(P.44参照)

販売体制の整備

- 一般家庭・子供を対象としたセルフ観光型の謎解きツアーは、地域内の既存のシーズンイベントに合わせて実施を検討する。シーズンイベントを運営する多摩センター地区連絡協議会が、ツアー運営も担っていく。
- 学校向けツアーは、市内の学校を対象に再度モニターツアーを実施し、内容の再検証を行うことを検討中。今後の販売及びツアー運営は地域内の旅行会社と連携を模索している。

継続的なPRの仕組み

- モニターツアーに組み込んだ施設を、単独でもコンテンツ化できるようにタリフを作成する。
- 多摩市のウェブサイトの特設ページを新設し、モデルコースの紹介を検討中。

式根島(P.49参照)

式根島 ツアーA

販売体制の整備

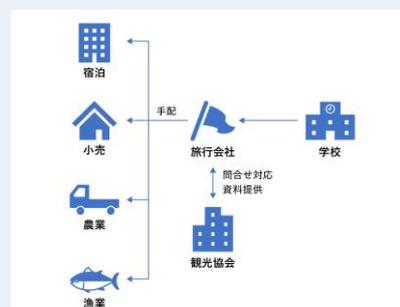
- 教育旅行はモデルコースがそのままの形で実施されることは少ないため、学校の希望に合わせて学校側や受入事業者との間に立って連絡・調整を行うコーディネーター役が必要となる。但し、その負荷が大きく、人手不足の観光協会が単独で担うのは難しいため、役割を分散して対応できる体制づくりを目指した(詳細はP.37参照)。

継続的なPRの仕組み

- 学校向け企画書を作成し、SDGsスタディツアーをいつでも紹介できるようにする。
- モニターツアーのツアーレポートを作成し、モデルコースとして観光協会ウェブサイトに掲載予定。

<式根島の販売・運営体制案>

- 観光協会が窓口となり、学校や旅行会社からの教育旅行に関する問合せに対し、資料を提供し誘致につなげる。
- ツアーのコーディネートと島の受入事業者への手配は旅行会社にゆだねる。
- 島の受入事業者は、各コンテンツを単品で販売できるよう、コンテンツの仕様や案内事項を事前に定める。それを旅行会社に販売する。
- 観光スポットでのSDGsについての説明は観光協会が有料で担う（今後、新たな人材の発掘が課題）。



ツアー催行日や発売時期、申込期限などを決定し、タリフの記載内容を確定

タリフとはツアーの概要や最少催行人数、受入最大人数、見学の所要時間、料金、予約問合せ先などの情報を分かりやすくまとめたもので、旅行会社や学校に説明する際に活用されます(タリフの例はP.11参照)。

モニターツアーを踏まえ、確定したツアー情報でタリフを完成させましょう。タリフの各項目の仕様を定めることで商品が完成します。以下は旅行会社への提供情報として、タリフへの掲載が望ましい項目です。

掲載項目	摘要ポイント
商品タイトル	✓ 直感的に商品内容がイメージできる端的なワードでネーミング
写真	✓ ツアーを象徴する写真を掲載
ツアーのポイント	✓ ツアーの「ウリ」を短いテキストで表現
価格 (体験料金・ツアー代金)	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 1人あたりの料金(人数によって変動させても可) ✓ 先生や添乗員の料金 ✓ キャンセルポリシー(取消規定と取消料金)
コンテンツ	<ul style="list-style-type: none"> ✓ ツアーに含まれるもの一覧(体験費用、食事、ガイドなど) ✓ ツアーに含まれないもの
スケジュール(所要時間)	✓ 学校を対象にする場合は、学校のニーズに柔軟に対応できることが望まれる
設定可能時期	✓ 催行可能な期間や曜日などを明記(シーズンリティを検証)
最少催行人員	✓ 損益分岐点を考慮し、最少催行人員を決定する
設定人員	✓ 最大何名まで受けられるか(最大受入人数)
支払い方法	✓ 手付金(デポジット)などの設定
参加条件	✓ 年齢制限、身長など
予約方法	✓ いつから予約を受けられるか/いつまで予約を受けられるか
事前注意事項	✓ 参加にあたっての注意事項(持ち物、事前に準備していただくものなどを記載)
雨天対応	✓ 屋外プログラムの場合、雨天時の対応が求められる
設備情報	✓ Wifi、トイレ、バリアフリーなど
バス駐車場情報	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 教育旅行の場合は必須 ✓ 収容可能台数や駐車料金
アクセス情報	✓ MAPが添付されているとよい
ツアー主催者 問合せ先	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 学校や旅行会社からの問合せ先 ✓ 関連ウェブサイトのURLなど

STEP7. 商品化後も振り返りと改善を

POINT



- 商品化後も継続的な見直しを
- サステナブル・ツーリズムの観点も意識した効果測定を実施する
- 地域関係者で振り返り会を行い、地域一体の取組につなげていく

商品化後も継続的な見直しを

商品化後もツアー内容や運営面の見直しを行いましょう。主に確認したい点は、STEP5に記載したチェックポイントと基本的に同じです。

実施体制についても、受入事業者の負担感(例:本業に支障が出ていないか、参加者と接することに慣れてきたかなど)や、ツアーの安全性なども考慮しながら必要に応じて見直し、継続的に実施できる体制を整えていきましょう。

サステナブル・ツーリズムの観点も意識した効果測定を実施する

SDGsスタディツアーを実施することで、P.16に記載したようなサステナブル・ツーリズムにつながる効果が得られたかを検証するためには、ツアー実施後のアンケートに以下のような項目を盛り込んだり、可能であればモニターツアーの際と同様に参加者と地域関係者による意見交換会やインタビューなどを行うとよいでしょう。

対参加者

- ・ 地域の魅力や課題に関する理解度・関心度
- ・ 地域への再訪意欲や推奨意向

など

対地域関係者

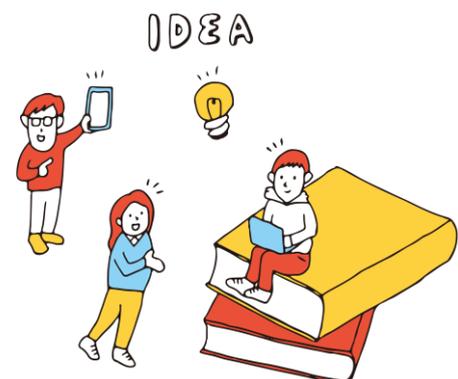
- ・ 自地域の魅力や取組あるいは課題に対するSDGsの観点からの理解度
- ・ 地域関係者の意識の変化(地域資源や取組への自信・誇り、地域課題への認識、新たな発見)

など

地域関係者で振り返り会を行い、地域一体の取組につなげていく

SDGsスタディツアーに取り組んだことで、地域の魅力や課題の整理や深掘り、参加者の発言から得られた自信や危機感など、地域関係者にとってさまざまな刺激や発見があったはず。それらをお互いに共有し、議論をする「振り返り会」を設けることは、SDGsスタディツアー自体の改善につながるだけでなく、地域課題の特定や、その解決に向けた取組のきっかけにもなります。

SDGsスタディツアーをきっかけに、地域一体となったサステナブル・ツーリズムへの取組につなげていくために、振り返りの機会を効果的に活用しましょう。



5 実践編～SDGsスタディツアー実施レポート

本事業では、都内の3地域でSDGsスタディツアーづくりに取り組みました。

実践編では、これら3地域でのツアーづくりの実践記録を紹介します。

事業を通じて、どのような課題があり、どんなプロセスを経てSDGsスタディツアーが完成していったのか、造成の流れや工夫、気付きなどを参照してください。

本事業でSDGsスタディツアーづくりに取り組んだ3地域

case	地域名	取組団体
1	墨田区	一般社団法人墨田区観光協会
2	多摩市	多摩市経済観光課、 多摩センター地区連絡協議会
3	式根島	一般社団法人式根島観光協会



※地域選定(公募)の経緯などの詳細は、東京観光財団

ホームページをご覧ください。

参考:ツアー造成協力地域の募集について(2022年6月/東京観光財団)

https://www.tcvb.or.jp/jp/news/2022/0614_4698/

各地域での取組は、下記の専門家の皆さまに監修協力いただきました。

【SDGs及び探究学習の視点】

横田 浩一氏(株式会社横田アソシエイツ 代表取締役/慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科 特任教授)

金井 隆行氏(株式会社TOKYO EDUCATION LAB 代表取締役)

【教育旅行商品造成(ツアープランニング)の視点】

中谷 ゆかり氏(株式会社TOKYO EDUCATION LAB ディレクター)

教材サンプルの紹介

上記3地域で作成した教材サンプルを公開中です。

下記URLからダウンロードしてご覧ください。

掲載先:https://www.tcvb.or.jp/jp/news/2023/0929_5594/



SDGsスタディツアーに取り組んだ背景・目的

背景

- 墨田区エリアは古くからものづくりのまちとして知られ、今なお多くの職人たちが伝統の技を継承し、生活に密着した品質の高い製品をつくり続けているが、後継者不足や認知度向上などが課題となっている。
- ものづくりの歴史や職人の技術に触れることでファンを増やし、認知度の向上を図りたいという思いから、墨田区観光協会ではスカイツリーの開業に伴い、修学旅行向けに複数の体験プログラムを開発し、学校向けの販売体制も整えている。
- 近年、学校側からSDGsや探究学習プログラムの要望が多いことから、SDGsを学習要素に加えたプログラムの造成が必要であると認識している。
- 墨田区は2021年に内閣府から「SDGs未来都市」と「自治体SDGsモデル事業」に認定され、産業・健康・環境分野を中心にSDGsへの取組を推進している。

目的

- 既存プログラムにSDGsの学習要素や職人との対話を加え、SDGsスタディツアーとして再構築することで、学校からのニーズに応えられるようにすること。
- ものづくりのまちとしての認知度を向上させ、ファンを増やすこと。
- 墨田区におけるSDGsの取組やサステナブルなものづくりを参加者に知ってもらい、反応を得ることで、取組の励みや新たな気づきを得ること。

地域の体制

実施主体(取りまとめ役)

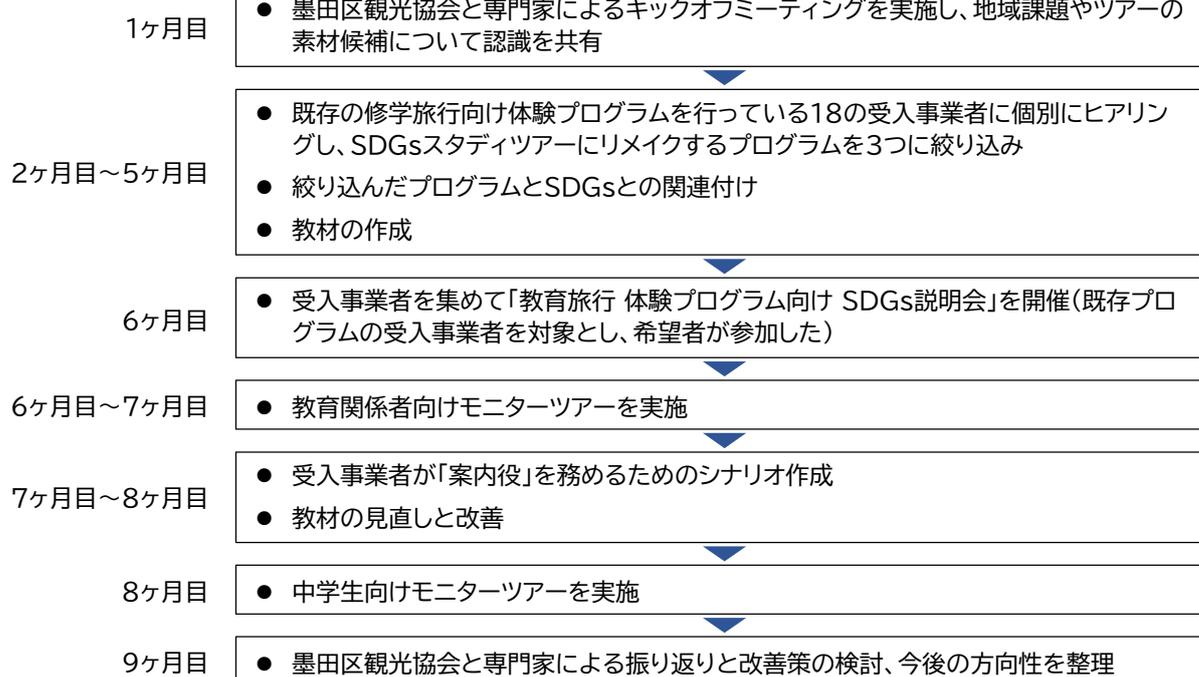
墨田区観光協会

受入事業者(コンテンツ提供者)

片岡屏風店(屏風製造)
アトリエアミーチ(皮革製品製造)
アトリエ創藝館(江戸文字提灯製造)

造成の流れ

<全行程9ヶ月>



苦勞した点

- ① 受入事業者(職人)自身が「案内役」となって関連付けたSDGsを解説すること、また、参加者の振り返りをファシリテートしてもらうことは難易度が高い。
- ② 受入事業者の中には以前から継続して行っている取組を、SDGsという言葉を使って語ることに對して抵抗感を抱く方もいた。

工夫した点

- ① 職人が自らの取組とSDGsとの関連性を理解した上で「案内役」を担えるよう、職人向け解説資料を作成した。また、ツアー中に解説して欲しいポイントやその順番を記載した案内役用シナリオも作成し、導入説明、体験中、振り返りの各場面において活用してもらった。さらに参加者には、SDGsとの関連性の解説などを記載したA4・1枚の教材(テキストとワークシート)を当日配布することで、職人からの説明を補完できるようにした。シナリオや教材の作成にあたっては、専門家の監修や墨田区のSDGsの担当部署からのアドバイスを受けた。
- ② 職人向けに、「教育旅行 体験プログラム向け SDGs説明会」を開催。専門家から伝統文化やものづくりとSDGsの関連についての解説や、教育分野におけるSDGsを通じた学びのニーズの高まり、教育旅行向けにSDGsスタディツアーを実施することのメリットをお伝えした。

実施地域の感想、気付きなど

墨田区観光協会

- 観光協会ではSDGsやサステナビリティに對して受入事業者がどのような思いを持っているのか関心はあった。事業を通してご意見を伺うことができただけでなく、受入側のお困りごとの把握や教育現場のニーズを共有する良い機会となった。
- 受入事業者は現場で働く職人さんなので、お話は面白い、「本物」のお話が聞ける。しかし、「SDGsとの関連について話してください」とお願いしても難しい面がある。モニターツアーでは、事前に準備したシナリオのポイントや順番に沿ってお話いただくことで、参加者用教材に記載したSDGsの解説とリンクし、職人さんのお話の魅力を損なうことなくSDGsの観点を子供たちに伝えることができたと思う。今後、他の事業者に横展開する際にも、シナリオをつくるのが大事だと感じた。
- 既存コンテンツにSDGsの切り口を加えたことで、商品バリエーションを増やせたと感じる。旅行者の選択肢が広がり、墨田区エリアを選んでもらえる機会が増えると感じた。コロナ禍で体験プログラムの受入件数が減った事業者もあるので、お客様の選択肢が広がることは受入事業者にとってもプラスだと思う。

受入事業者

<片岡屏風店>

- シナリオがあったことで全体の流れがイメージでき、自身の学びにもなった。そのまま読むだけでなく、自分なりにアレンジをして伝えるよう工夫した。
- 他の受入事業者との意見交換の場があれば、考え方や進め方の情報共有ができて、お互い勉強になるのではないかと感じた。

<アトリエアミーチ>

- シナリオのおかげでポイントを絞って説明することができた。SDGsの概念は広く、深く、難しいが、自身が行う事業についても整理ができ、学びになった。
- 質問の仕方により、参加者からいろんな回答が聞けたことに驚いた。想定問答集があるといいと感じた。

<アトリエ創藝館>

- 自身の取組とSDGsの関わりがシナリオと教材によって整理された。シナリオの内容はモニターツアー終了後も、通常の体験でも取り入れて活用している。



所要時間

2.5時間(体験2時間+振り返り0.5時間)

対象年齢

中学生

行程

集合(最寄り駅)→各受入事業者の工房で体験→振り返り(数名からSDGsに関する気付きや学びを発表)→最寄り駅で解散

ツアーA

片岡屏風店【からくり屏風づくり体験】

地域の素材とSDGsとの紐づけ(一例)

●端材の有効活用

屏風の製作工程では和紙や箔などさまざまな端材が発生する。片岡屏風店ではそうした端材の美しさを生かして封筒やポチ袋などに商品化して、リユースブランド「OTOSHI」として販売している。

不用品として処分されるものを再活用しているという点でSDGs12番「つくる責任 つかう責任」、廃棄物を削減し、処理にかかる資源やエネルギーの消費を抑えている点でSDGs13番「気候変動に具体的な対策を」と関連する取組。

●伝統の手仕事を守る分業の仕組み

屏風が出来上がるまでは伝統的な技術を用いて、手作業による分業でつくられている。刷毛や糊など、工程で使われる道具一つ一つに、それぞれの職人の技術が活かされている。日本の多くの伝統工芸品は、こうした職人たちの協力(パートナーシップ)によって出来上がっている。

工程に携わる職人たちが、歴史や伝統を守るために互いに協力し合うという点でSDGs17番「パートナーシップで目標を達成しよう」の達成に寄与している。

概要

1946年創業の片岡屏風店は東京で唯一の屏風専門店。屏風のつくり方や歴史、ものづくりのまちとして発展してきた墨田区の歴史について、店主のお話を聞きながら、開いた面によって絵柄が変わる「からくり屏風」づくりを体験する。



参加者に配布した教材(テキスト兼ワークシート)

ツアーB

アトリエアミーチ【革クラフト体験】

地域の素材とSDGsとの紐づけ(一例)

●長く使える素材「革」

1枚の革に仕上がるまでには多くの加工行程があり手間がかかるが、丈夫できちんと手入れすれば長く使い続けることができる。

限られた資源を活かし長く使い続けるという点で、SDGs12番「つくる責任 つかう責任」の達成に寄与している。

●食肉の副産物を有効活用

革は豚や牛などの食肉の副産物であり、これらを有効活用している。

食物の副産物を廃棄せず、有効利用しているという点で、SDGs12番「つくる責任 つかう責任」の達成に寄与している。

概要

アトリエアミーチは革のクラフト教室。墨田区で皮革加工業が根付いた理由や、ものづくりのまちとして発展してきた墨田区の歴史について、店主のお話を聞きながら革のポーチづくりを体験する。



参加者に配布した教材(テキスト兼ワークシート)

アトリエ創藝館【江戸文字体験】

地域の素材とSDGsとの紐づけ(一例)

●「江戸文字」とお祭り

江戸文字が描かれる提灯はお祭りに欠かせないもの。墨田区には多くのお祭りがあり、そのたびに江戸文字を描く「描き屋」に注文が入り、商いが成り立っていた。このようにお祭りは地域の経済を循環させ、人々の仕事を増やす役割を果たしていた。

お祭りが行われることにより、地域の経済が循環することや仕事が増えるという観点から、**SDGs8番「働きがいも経済成長も」、SDGs11番「住み続けられるまちづくりを」**の達成に寄与している。

●伝統の手仕事を守る分業

提灯や扇子はそれぞれ専門の職人がつくり、文字入れの工程で江戸文字の「描き屋」に運ばれる。江戸文字を描く筆も専門職人がつくっている。日本の多くの伝統工芸品は、こうした職人たちの協力(パートナーシップ)によって出来上がっている。

工程に携わる職人たちが、歴史や伝統を守ることを目標に互いに協力し合うという点で、**SDGs17番「パートナーシップで目標を達成しよう」**の達成に寄与している。

概要

アトリエ創藝館は提灯や看板などに毛筆で江戸文字を描く工房。江戸時代の町人文化を感じることのできるデザイン文字としての江戸文字の成り立ちや、ものづくりのまちとして発展してきた墨田区の歴史について、店主のお話を聞きながら、提灯に江戸文字を描く。



参加者に配布した教材(テキスト兼ワークシート)

3つのツアーに共通する学びとSDGsへの紐づけ(一例)

伝統工芸や産業を守る墨田区の「ものづくりのまち すみだ」の取組は、社会面(地域の文化を支える資源)と経済面(観光資源)でまちづくりを支えている。これらの取組は、地域の内外の人たちに対して、地域の文化に触れる機会を増やすことにもつながる。

伝統工芸や産業を守ることで地域の社会と経済を支える取組は**SDGs11番「住み続けられるまちづくりを」**に、地域の文化に触れる機会を提供している点は**SDGs4番「質の高い教育をみんなに」**の達成に寄与している。



ツアーA 片岡屏風店【からくり屏風づくり体験】の様子



ツアーB アトリエアミーチ【革クラフト体験】の様子



ツアーC アトリエ創藝館【江戸文字体験】

case
2

多摩市

SDGsスタディツアーに取り組んだ背景・目的

背景

- 多摩センター地区は多摩ニュータウンに代表される集合住宅を中心に文化・商業施設などが集積し、公園や学校が立地する計画都市である。
- 多摩市の人口は多摩ニュータウン開発に伴い急増したが、近年は横ばい。一方で老年人口が急増している。
- 2018年に開館した「長谷エマクションミュージアム」、2020年にオープンした「KDDIミュージアム」など、近年は見応えのある大型ミュージアムが開館しているが、地域外では認知度が低い現状がある。
- 新型コロナウイルスなどの影響により、エリア全体の来訪者が減少している。土日のイベント集客だけでなく、平日の日常的な来訪を増やしたい。

目的

- 平日に開館しているミュージアムなどを活用したツアー造成により、日常的な来訪を促すきっかけをつくること。
- 多摩センター地区で取り組んできた住みやすいまちづくりの工夫を発信し、PRすること。
- 多摩センターの魅力や歴史や背景も含め深く理解できるツアーをつくることで、地域のファンや住民のシビックプライドを醸成し、中長期的にまちを盛り上げる担い手を増やすこと。

地域の体制

実施主体(取りまとめ役)

多摩市経済観光課
多摩センター地区連絡協議会

ツアー造成パートナー(資源調査・企画)

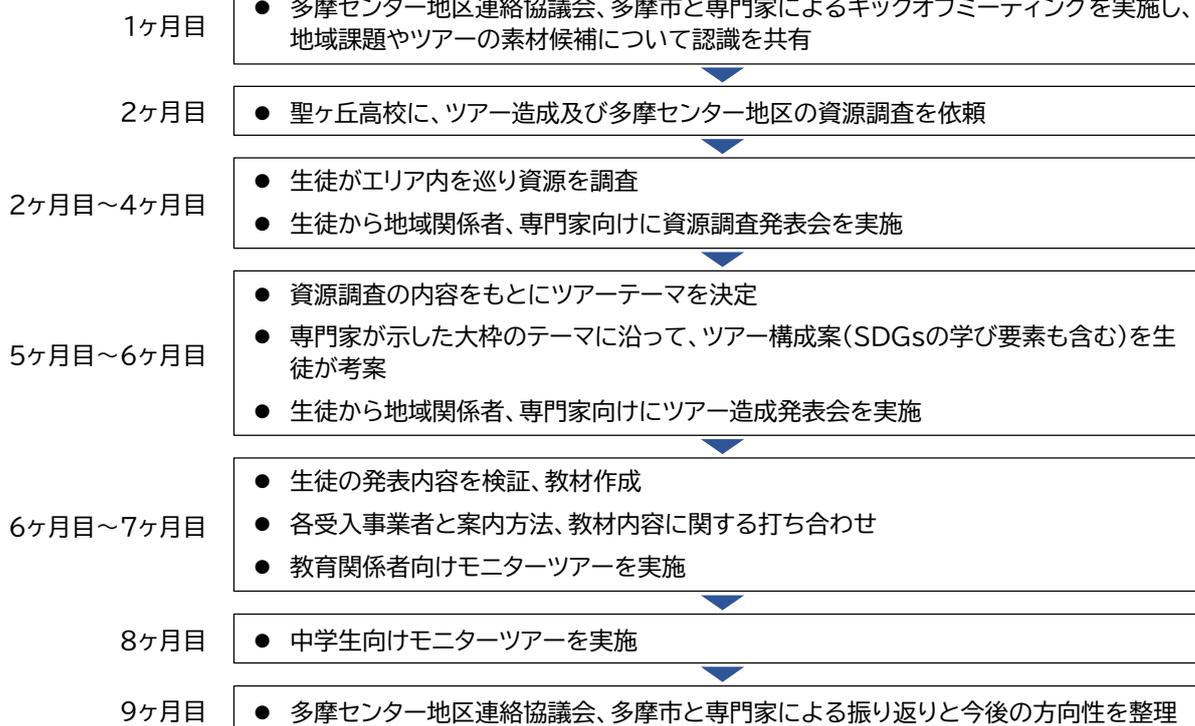
私立多摩大学附属聖ヶ丘高等学校

受入事業者(コンテンツ提供者)

東京都立埋蔵文化財調査センター(施設見学・体験)
長谷エマクションミュージアム(施設見学)
KDDIミュージアム・KDDIアートギャラリー(施設見学)
パルテノン多摩ミュージアム(施設見学)
多摩めかい^(注)の会(伝統工芸体験)
(注)めかい:多摩地区の里山に自生するシノ竹を使ってつくられる竹籠

造成の流れ

<全行程9ヶ月>



苦勞した点

- ① 「SDGsの学び」の素材となる地域資源が十分に発掘できていない。一体的に発信できていない。
- ② 企業ミュージアムツアーはガイド内容、営業日や見学人数が決まっており、内容を変えることが難しい。
- ③ 受入事業者自身がSDGsに関連付けた解説を行うことは難易度が高い。
- ④ 観光地ではないため、地域を横断的にガイドできる人材の確保が難しい。

工夫した点

- ① 市内にある多摩大学附属聖ヶ丘高校の探究学習の一環として、生徒とともにツアー造成を行った。生徒には地域の素材探しやツアー中の学びの内容や演出の検討などに協力してもらった。地域で暮らす生徒の目線で、面白いと思うもの、SDGsが学べると思う地域資源を探してもらった結果、市民活動として伝承されてきた「めかいづくり」を素材として活用するなどのさまざまな案が出た。
- ② 既存の展示・ガイド内容を活かし、展示内容に沿ったクイズを作成した。クイズラリー形式で各企業のサステナブルな取組を学び、答え合わせ時に解説を読むことで、SDGsと紐づけられる構成にした。【ツアーB】
- ③ 受入事業者側の口頭説明を補足する資料として、ツアー時に参加者に配布するワークシートに施設ごとの注目ポイント(SDGsと関連する要素)を記載し、参加者自らが見学・体験を通してSDGs達成につながるヒントを見つけるという探究学習に仕立てた。【ツアーC】
- ④ 案内役がいなくても成立するセルフ観光型ツアーの造成では、楽しめる仕掛けとして「謎解き」の要素を加えた。これにより学習目的だけでなく、「謎解き」を好むマーケットのニーズも見込めるツアーとなった。【ツアーA】

実施地域の感想、気付きなど

多摩市経済観光課・多摩センター地区連絡協議会

<多摩市経済観光課>

- 都市計画やまちづくりに関するSDGsは伝えるのは難しいという話も聞かすが、モニターツアーでニーズがあることが確認できた。今後もまちづくりなどに関心がある層をターゲットに発信していきたい。
- 多摩市の公式サイト内に2022年に新しく開設した多摩センター地区の特設ページに、今回のツアーをモデルコースとして掲載し、市内外に向けて周知を図ることを検討している。

<多摩センター地区連絡協議会>

- これまでも市内向けのイベントは行っていたが、SDGsスタディツアーの造成により、市外もターゲットにすることができ、地域の可能性を広げることができた。
- 東京都立埋蔵文化財調査センターに体験をはじめとしたコンテンツが豊富にあることを知らなかったため、地域を改めて知ることができた。
- 地域にある旅行会社が新たに協議会に加盟する予定である。今回のSDGsスタディツアーにも興味を示しており、プレイヤーの広がりが期待できる。



ツアーC 「多摩センターで体験～昔の人のサステナブルな暮らし～」モニターツアーの様子

受入事業者

<東京都立埋蔵文化財調査センター>

- 普段の説明ではSDGsの切り口はあまり使っていない。縄文時代の生活と現代の目標であるSDGsを関連付けることは難しい面もあるが、縄文時代は1万年以上続いたサステナブルな時代なので、SDGs達成へのヒントはたくさんあると思う。今回のツアーでは子供たちの想像力を膨らませ、ヒントを自ら探してもらえよう説明を工夫した。

<長谷工マンションミュージアム>

- SDGsに取り組むことは重要だと感じている。社会科見学の需要は増えており、今回のツアーを通して、より分かりやすい展示や年齢に応じた展示を充実させていく必要性を感じた。

<KDDIミュージアム>

- SDGsに興味関心を持った意欲的な子供たちが集まってくれたので、案内がしやすいと感じた。

<パルテノン多摩ミュージアム>

- 展示はもともとSDGsを意識してつくっているため、こういう機会にうまく活用できてよかった。クイズ形式のツアーに仕立てたことで、展示内容をじっくり見てもらえたと思う。里山管理やニュータウン開発の取組には、改めてSDGsに関連するものが多いと感じた。今後の展示内容でも伝わる工夫をしていきたい。

<多摩めかいの会>

- めかいはSDGsという言葉が出てくる以前からのもので、我々の生活の中でやってきたことなので、あえてSDGsという言葉には触れずに説明した。普段、めかいの歴史や成り立ちについて話すことはなかったので、改めて見直しやすい経験になり、スタッフの新たな発見につながった。一方で、有志による趣味の活動であることから、安定した人手の確保や教育旅行を受け入れられるほどの材料の大量調達ができないことから、継続的なツアーの受入は難しいと感じた。

ツアーA 謎解き×SDGs「不思議な謎解き日記～多摩センターのまちづくりを探す旅～」

所要時間 2～3時間 対象年齢 小学生以上

概要

多摩センターに人が集まる理由、住み続けられるまちづくりの工夫を知ることをテーマとし、謎を解くことでまち全体に回遊を促し、楽しく学べる仕掛けをつくった。

行程

多摩センター駅集合 → 謎を解きながら多摩センターエリア内を散策 → パルテノン多摩で答え合わせ → 順次、現地解散

地域の素材とSDGsとの紐づけ(一例)

- 多摩センターエリアは都市機能を集約することを目的にまちづくりが行われてきた。各スポットからまちづくりの工夫を見つけ、謎解き全体を通して、SDGs11番「住み続けられるまちづくりを」へつなげる取組を学べる構成とした。
- 謎解きクリア後に配布する解説書では、各スポットがどのような役割を担っているのかを解説している。



謎解きのリーフレットの1ページ



SDGsの解説書

ツアーB ミュージアム×SDGs「多摩センターSDGsクイズラリー」

所要時間 7時間(昼食含む) 対象年齢 小学校高学年～高校生

概要

多摩センターは埋蔵文化財や民間企業のミュージアムが集積していることから、クイズラリー形式で各施設を回るツアーを造成。各施設・企業のSDGsに関連した取組が学べるクイズを作成し、ワークシートとして配布した。

ツアーの最後は参加者全員で振り返りを行い、気付きや感想、自分なりのSDGsへの紐づけとマイ・アクション(明日から自分はどうな行動をしようかと思うかという意見)を参加者全員が発表することで相互に理解を深めた。

行程

多摩センター駅集合 → 2班に分かれ、長谷工マンションミュージアム・KDDIミュージアムのどちらかを見学 → KDDIアートギャラリー → 昼食 → 東京都埋蔵文化財調査センター → パルテノン多摩ミュージアム → 振り返り → 現地解散

地域の素材とSDGsとの紐づけ(一例)

- 長谷工マンションミュージアムを運営する長谷工コーポレーションでは、自社で設計・施工する分譲マンションに災害後時に役立つ防災設備「防災3点セット」の設置を進めている。「防災3点セット」の内容をクイズとして取り上げ、解説で長谷工コーポレーションの防災対策を解説した。災害時に居住者の生活基盤を確保するという点で、SDGs11番「住み続けられるまちづくりを」やSDGs9番「産業と技術革新の基盤をつくろう」に関する学びにつながっている。



当日配布したワークシート

ツアーC 昔の暮らし×SDGs「多摩センターで体験～昔の人のサステナブルな暮らし～」

所要時間 7時間(昼食含む)

対象年齢 小学校高学年～高校生

概要

多摩センターの歴史、人々の暮らしからSDGsを達成するためのヒントを見つけることをテーマに、3つの施設での体験をメインにしたツアーを造成。各体験がどういった観点で、どのSDGsを達成するヒントになりそうかを探究学習できる構成でワークシートを作成した。

振り返りでは、ツアーを通じて学んだSDGs達成のヒントから、マイ・アクションをワークシートに書ける構成とした。

行程

多摩センター駅集合 → 東京都立埋蔵文化財調査センターで縄文の生活を体験(火おこしやムクロジ石鹸づくりなど) → 昼食 → 多摩市立グリーンライブセンターで多摩の伝統工芸・めかひづくり体験 → 江戸時代の古民家・旧富沢家で見学 → 振り返り → 現地解散

地域の素材とSDGsとの紐づけ(一例)

- 東京都立埋蔵文化財調査センターには、多摩ニュータウンの遺跡から発掘した出土品が展示してある。約1万年も続いた縄文時代から、持続可能な暮らしのヒントを見つけることをテーマに、プログラムを造成した。例えば、縄文人が土器を発明したことによって、煮炊きで加工して保存できる食料が増えたことが分かる。これらのことから現代でも学べるヒントを探った。

その結果、人々は定住して生活ができるようになったことからSDGs11番「住み続けられるまちづくりを」や、調理技術の向上によりさまざまな食料が食べられるようになったことからSDGs2番「飢餓をゼロに」について考える上でのヒントが学べる。



当日配布したワークシート

case
3

式根島

SDGsスタディツアーに取り組んだ背景・目的

背景

- 海水温上昇にともなう漁獲量の減少、海岸に漂着する海ごみなど、世界的な環境問題は式根島にも大きな影を落としている。また、日本全体の問題にもなっている人口減少や少子高齢化も、式根島にとっても島の存続にかかる大きな課題となっている。
- 新島村の一部であり、開島135周年を迎えた式根島は、厳しい自然環境と少ない資源の下で自助・共助で地域づくりをしていく機運が高い地域であり、地域コミュニティに蓄積された物語からは学ぶことが多くあると認識している。
- 現在、学校教育ではSDGs学習が盛んに行われているものの、上記のような社会課題や地域コミュニティを肌で感じられるフィールドは都内では少ないため、島内学生のみならず島外学生にも学習の機会を創出するとともに、島の魅力も知ってもらいたい。

目的

- 人口減少、少子高齢化、海ごみといった島が抱える課題をコンテンツにし、来訪者とともに解決策を考えることで関係人口づくりにつなげること。
- 島の暮らしや生業といった地域素材を磨き上げ、観光コンテンツ化して体験してもらうことで、助け合いによる島づくりの工夫や課題を伝えること。
- 大規模な教育旅行の受入は難しいが、夏の繁忙期以外の新たなターゲット層の誘客を目指し、小規模のSDGs学習サークルや学習要素を求める親子旅のニーズについて検証すること。

地域の体制

実施主体(取りまとめ役)

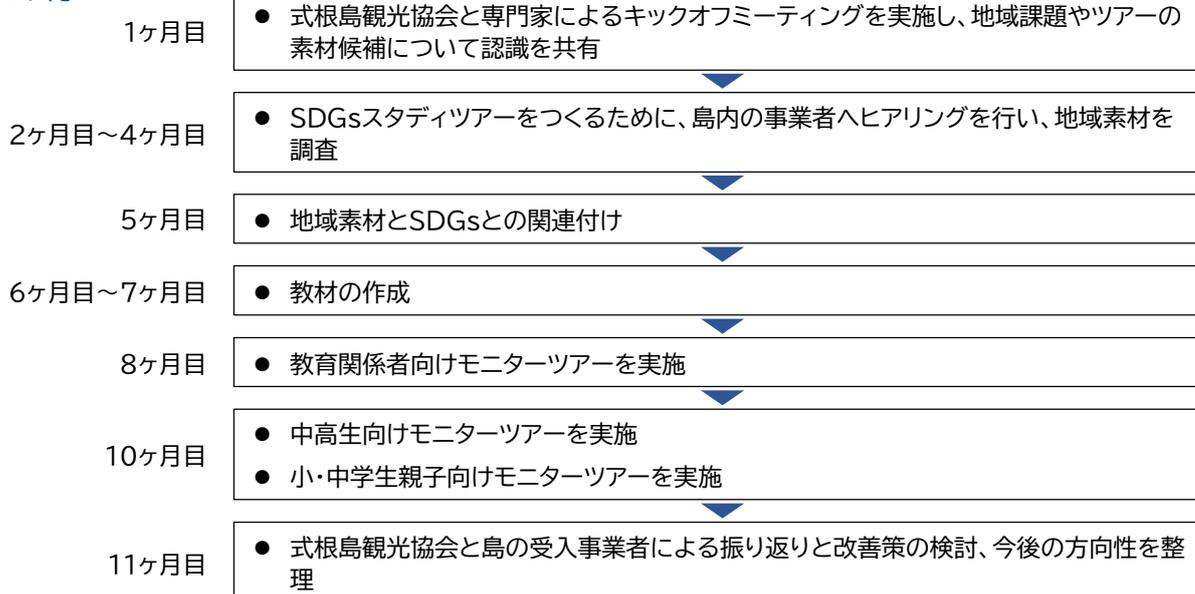
式根島観光協会

受入事業者(コンテンツ提供者)

式根島青年団「しきね想島会」(ビーチクリーン活動)
 東要寺(島の暮らしに関するお話と境内見学)
 おくやま商店(農業体験)
 藤井サービス工業(電気自動車体験)
 式根島養殖場(真鯛の養殖体験)

造成の流れ

<全行程11ヶ月>



苦勞した点

- ① 助け合いによる島づくりをテーマに島の暮らしをコンテンツとして磨き上げるには、島の人と旅行者との交流をどのように実現するかがポイントとなる。観光業以外の住民にとっては自らの仕事をどのように見せるのか、どのように交流するのがイメージしにくいいため、これまでコンテンツ化は難しかった。当初案では会議室で島の方々ワークショップを行う想定だったが、それでは「島の暮らしを実感できないのでは」という懸念があった。
- ② 観光協会では人手不足が深刻な課題である。人手不足でも無理なく受入が続けられるようなツアー構成やオペレーションの配慮が求められた。

工夫した点

- ① 農業や漁業などの第一次産業に携わる方や青年団、レンタカー事業者などのさまざまな分野で地域を盛り上げる活動を行う関係者が一堂に集まる場を設けたことで、いろいろなアイデアが生まれた(詳細はP.35参照)。それらのアイデアをもとに、島の暮らしや、島の課題に触れる職業体験プログラムをツアーに組み込んだ。【ツアーA】
- ② 学校対象のツアーとは別に、親子旅をターゲットにした着地型旅行商品を造成した。島に来訪する旅行者(親子)がSDGsを楽しく学べるよう「4つのミッション」を設定。「ミッション冊子」を手に自由に島を巡るスタイルのツアーを造成した。【ツアーB】

実施地域の感想、気付きなど

式根島観光協会

- 島の多様な事業者と一緒に取り組めたことは、今後の島の活性化に向けて機運の醸成につながり大変有意義だった。本事業で作成した複数の教材は、今後大いに役に立つ。教育関係者向け・中高生向けのモニターツアーでは、ガイド役を担ったことで改めて島の取組を再確認できる機会となり、学びになった。
- SDGsをテーマにしたツアー造成は、誘客面での効果のほか、自分たち自身が地域を見直すよい機会になる。SDGsに対する島民の意識も向上し、また島の暮らしの良さを改めて認識することにもつながった。



ツアーA「島の自然と暮らしからSDGsを体感するツアー」モニターツアーの様子

受入事業者

<式根島青年団「しきね想島会」(ビーチクリーン活動)>
「できる事をできる時にできる人がやる」、これが私たちの活動のスタンス。ビーチクリーンも無理のないペースで地道に続けている。こういった活動に共感いただき外部の方が参画していただくことは、大変励みになる。外からの刺激を受けることで私たちのSDGsへの意識も向上した。

<おくやま商店(農業体験)>
参加してくれた皆さんが喜んでくれたことが嬉しい。今回、中高生の皆さんを受け入れるにあたって島のいろいろな人が協力してくれた。借りた「手間」は「手間」で返す、この互助の精神が島の生活を支えている。島の暮らしのそういった都会とは違ったさまざまな魅力があるので、多くの人に知ってもらえる機会を多くつくりたい。そのためにも、今後もこうした取組に積極的に協力したい。

<藤井サービス工業(電気自動車体験)>
島を活性化するためには新たなチャレンジが必要。EV車の導入もその一つである。商品化するにはさらなる改善が必要であり、提供できるコンテンツがこれ一つだけではビジネスにはなりづらい。観光業は島の基幹であるため、今後もさまざまなコンテンツ造成に関わっていきたい。

ツアーA 中高生向け「島の自然と暮らしからSDGsを体感するツアー」

所要時間 2泊3日(船中1泊)

対象年齢 中学生～高校生

概要

式根島の大自然や地球の息吹(風、海、温泉など)を肌で感じ、島の人々の話や実際に目で見えた景色から地球温暖化の影響や海ごみ問題を学ぶ。また、島の仕事の見学・体験での島民の方とのふれあいの中から「島の暮らし」を知ること、SDGsを通して守りたいもの・目指したいものを参加者自身が考えるツアー。

行程

1日目 夜 竹芝棧橋出発～船中泊
2日目 式根島着→ツアー趣旨・行程説明→地鉈温泉→東要寺→島の仕事を見学・体験(班別に分かれ、どれか1つを体験)

- 1) 農業 式根島特産「あめりか芋」の畑で農作業を体験!
- 2) 漁業 真鯛の養殖場で餌やり作業などを体験!
- 3) エネルギー&防災 災害時にも役立つ電気自動車を体験!
→本日のまとめ

3日目 神引展望台→ビーチクリーン→振り返り会→ジェットfoilで竹芝棧橋着
※島内移動はすべて電動自転車

地域の素材とSDGsとの紐づけ(一例)

主催側からSDGsとの紐づけは示さず、参加者自身に考えてもらい、最終日にグループ発表する形をとった。発表の際に主催者が行った工夫は以下のとおり。

- 参加者を5人ずつ4つの班に分け、班行動を基本とした。
- 各参加者はツアー中、それぞれの気付きを各自でワークシートにメモ。
- 2日目の終わりに班別の振り返りの時間を設け、班ごとにグループワークを実施。それぞれの気付きを付箋に書いて共有。
- 3日目最後の振り返りでは、班としての意見を集約して発表。参加者全員が以下の3つの視点で一人一人発言を行った。

- ・島のどういう点が魅力的で、どういう点が課題と感じたか
- ・その課題についてどう取り組むといいと思うか、その取組がどのSDGsのゴールに対応すると考えたか
- ・今回のツアーでの経験を受けて、自分は日常生活でどのようにアクションしたいと考えたか

参加者が考えたSDGsとの紐づけの一例

- ・漁業体験で、人口減少と高齢化によって漁師さんが減ったので、真鯛の養殖を始めたという話を聞いた。ただし、養殖場はできたが後継者が見つかっていないということで、**SDGs11番「住み続けられるまちづくりを」**に取り組むことの大切さを感じた。
- ・ビーチクリーンを行って、普段生活の中で使っているものが砂浜にごみとして打ち上げられているのを目にした。**SDGs12番「つくる責任 つかう責任」**を自分たちの問題として捉えることができた。

ツアーB 小・中学生親子向け「親子で島旅を楽しみながらSDGsを学ぶセルフ型ツアー」

所要時間 2泊3日(船中1泊)

対象年齢 小・中学生

概要

「地球を救え SDGs4つのミッション」というタイトルの冊子を作成。そこで提示されたミッションをクリアしながら、親子でSDGsの達成に向けて自分たちにできることを考えるプログラム。

行程

- 1日目 夜 竹芝棧橋出発～船中泊
2日目 終日自由行動(配布したワークシートを使い、4つのミッションから2つ以上に挑戦)
- 1)海辺の生き物を守ろう
 - 2)未来の海を守ろう
 - 3)エネルギー問題を考えよう
 - 4)地球の未来を考えよう
- 3日目 自由行動(引き続きミッションに挑戦)→ジェットfoilで竹芝棧橋着

地域の素材とSDGsとの紐づけ(一例)

配布したワークシートで4つのミッションをSDGsに紐づけて設定した。4つのミッションと解説は以下のとおり。

mission1. 海辺の生き物を守ろう

天然記念物のオカヤドカリをはじめ、海岸で見られる生物を観察し、生物多様性や生態系について学ぶ。解説では、それらが地球温暖化によって危機を迎えていることを示唆し、**SDGs14番「海の豊かさを守ろう」**を達成するための方法を考えていく。

MISSION1 海辺の生き物を守ろう! - もっと知る -

生物多様性と生態系ってなんだ?
 たとえば、磯にはさまざまな生き物がいるよ。カニやヤドリ貝から、私たちが目には見えないほど小さなプランクトンなど、さまざまな生き物がいるね。

こうした海の生き物たちはどうして生きているの?
 いろいろな生き物たちがはたらく(存在)しているのだから、食べたり食べられるたり(食物連鎖)すべてが互いに関係して生きているんだ。

これら生態系に思いやりのある生き物の生きていること、生物多様性を守ること、
 ひとつの生き物を絶滅すると、他の生き物にも影響してくるよ。
 たとえば、ある植物がなくなると、それを食べていた動物も生きていけなくなる。
 すると、今度はその動物の生態系も壊れていくことになる。

世界の生き物は絶滅の危機に
 絶滅の危機にさらされているから、今、
 私たちができることは、絶滅の危機にさらされている生き物
 に与える影響は避けたいよ!

今、地球の生態系が危機を迎えているんだ
 温暖化が生態系に与えている影響は
 アオソギや赤潮は、激減した海の生き物の数を減らす、オオメノシロガサ
 るんだ。温暖化が海を暖め、海水が浅い場所ではオオメノシロガサが
 生かす。温暖化により海の温度が上がると、メダカが死んで、オオメノシ
 ラスが死んで、繁殖できなくなる恐れがあるんだ。

或る島の海産物の危機
 温暖化が海を暖め、海水が浅い場所ではオオメノシロガサが
 生かす。温暖化により海の温度が上がると、メダカが死んで、オオメノシ
 ラスが死んで、繁殖できなくなる恐れがあるんだ。

海産物の危機
 温暖化が海を暖め、海水が浅い場所ではオオメノシロガサが
 生かす。温暖化により海の温度が上がると、メダカが死んで、オオメノシ
 ラスが死んで、繁殖できなくなる恐れがあるんだ。

SDGsの目標14「海の豊かさを守ろう」
 海に暮らす動物、植物、生き物に暮らしている生き物たちが、健全な海の豊
 さを守るには、わたしたちが自然の恵みを守ることに心がけよう。
 まずは、自分でもできることを考え、実践してみよう。

当日配布したワークシート

編集後記

本事業においてSDGsスタディツアーの造成・実施に尽力して下さった都内3地域の関係者の皆さま、そして先進事例の取材に協力して下さった都内外の地域関係者の皆さまに、心より御礼申し上げます。

取材で印象に残った言葉に「観光が主役のまちにはいけない」というある先進事例地域の方の意見がありました。観光客向けの商店が増加し、住民が日常的に利用する商店が減少することで、地域独自の雰囲気や文化が失われ、最終的には観光客からも飽きられてしまうという趣旨の言葉でした。サステナブル・ツーリズムを考える上で非常に示唆に富んでいると感じます。観光振興を目的とする組織としては、つい観光を主軸に考え、地域外からの誘客施策に目が向きがちですが、地域の真の魅力を維持し高める施策の重要性を再認識させられました。

そして、長期的な地域の魅力向上の鍵となるのは、地域の誇り(シビックプライド)です。住民が地域を深く学び、愛することで、その地域を守り、自慢したいと思うことが、持続可能な観光の原動力となります。つまり、シビックプライドを高める施策は、サステナブル・ツーリズムを推進する上で非常に重要であるといえるでしょう。

本事業でSDGsスタディツアーを催行し、印象的だったのは、ツアーに参加した子供たちがSDGsという切り口から真剣に地域と向き合ってくれたことです。参加者の大半は地域外の子供たちでしたが、地元の子供たちが参加すれば、自分たちの地域を深く学ぶことでシビックプライドを高める効果が期待できると感じました。地域外からの誘客だけでなく、教育分野と連携しながら地元の子供たちに焦点を当てた施策を進めることも、サステナブル・ツーリズムにつながる取組になると思います。

本書内でも述べましたが、サステナブル・ツーリズムとは、個別の施策や取組を指すものではなく、あらゆる観光施策のベースとなる考え方です。当然、SDGsスタディツアーという一手段だけで実現されるものではありませんが、地域関係者が分野の垣根を越えて連携することにより効果的な推進につながると考えます。本書の内容が皆さまの地域におけるサステナブル・ツーリズムの実践に役立つことを心から願っております。

最後に、本書の制作に際し、SDGsや探究学習の観点では慶應義塾大学の横田浩一先生、サステナブル・ツーリズムの観点では東洋大学の古屋秀樹先生、教育旅行商品のプランニングの観点では株式会社TOKYO EDUCATION LABの中谷ゆかり様から貴重なアドバイスを賜りましたこと、この場を借りて深く御礼申し上げます。

公益財団法人東京観光財団 地域振興部



※「シビックプライド」は株式会社読売広告社の登録商標です。

都内観光協会・区市町村向け
サステナブル・ツーリズムにつながる
スタディツアーをつくろう
造成ノウハウ&実践事例集

2023年9月
公益財団法人東京観光財団





TCVB 公益財団法人 東京観光財団
Tokyo Convention & Visitors Bureau

